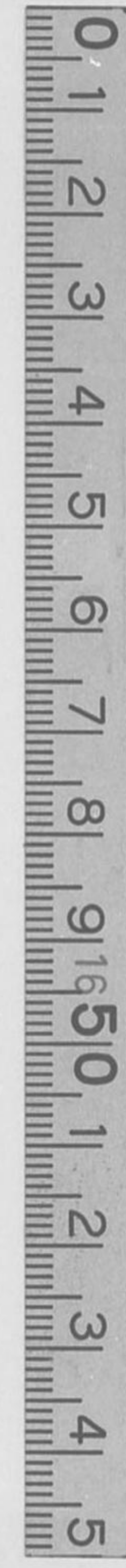


特46
797

能楽写真 1
国立国会図書館



始





真寫樂能

附書傳口習獨曲謠

號壹第



能樂寫真第一號目次

- ◎ 發行の旨趣
- ◎ 口書鉢木(御題雪中の松)
- ◎ 能樂寫真
- ◎ 同寫真説明
- ◎ 謠方
- ◎ 謠の手引
- ◎ 節くらべ
- ◎ 小節の心得
- ◎ 姿勢の心得
- ◎ 扇子の心得
- ◎ 素謠着座の心得
- ◎ 質問應答
- ◎ 投書
- ◎ 雜錄
- ◎ 雜報
- ◎ 稟告(謠曲家全數)
懸賞大募集

坂巻耕漁筆

特46
797

發行の主意

近年謠曲の流行ことは實に盛大にして、老若男女を問はず、我れは何々流とものが好む所に隨ひて之を學ばざるはなければ、如何なる邊士遠郷に至るも五流即ち觀世實生(以上の二流を上掛りといふ)金剛金春喜多(以上の三流を下掛りといふ)の中何流かの聲のせざる所なし、然るに都下に於ても謠曲は諷ふが能樂はまだ見たる事なしといふ向き甚はだ尠からず、是れ劇職のため又は他の事情のために制せられて心ならずも斯く能樂と疎遠に及べるに外ならざるべし又廣く世間を見渡せば、所謂邊士遠郷には能樂を觀んよすがなくて一見の快樂を試ることの叶はぬ向きあり、されども苟くも謠曲を諷ふものにして能樂の何物たるを知らざるは、單に見聞の廣からざる耻のみならず、謠曲の眞の趣味をも解する事能はざるべし、何を以て爾いふといふに、譬へば狸々一番を諷はんか、ワキが「是れは唐土かねきんさんの籠揚子の里にかうふうと申す民にて候ふ」と名乗れど、如何なる裝束を着て如何なる態度にて謠ふかが知れざるべく、又シテが「みさこさく」と諷へど、シテは狸々とばかり心得て、此れ亦如何なる假面を着け如何なる裝束を着如何なる態度にて謠ふかを知らざるべし、果して是くの如くならんには、何程謠曲を學びたりとて趣味ある謠曲は

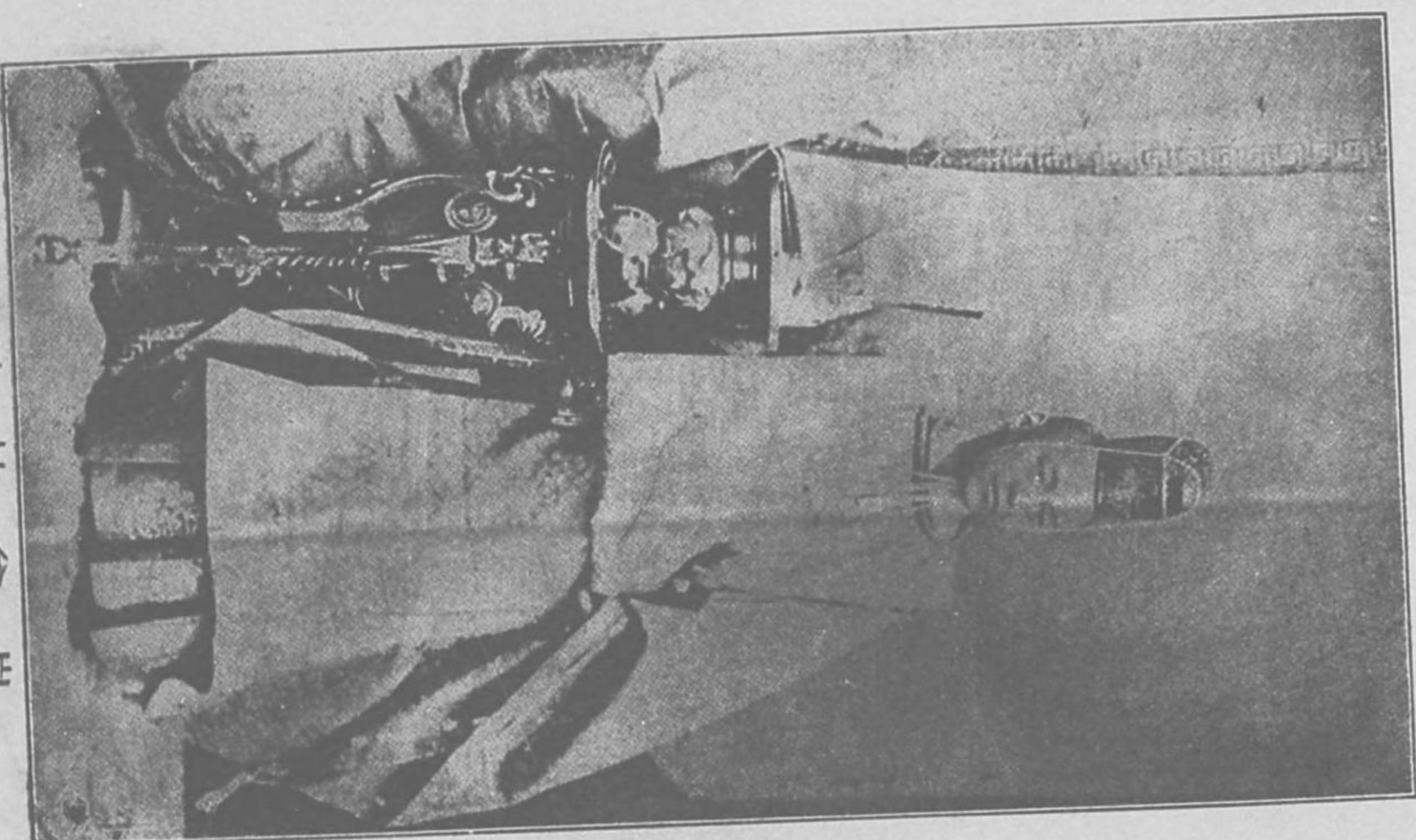
諷ふべくもなく、第一役々の位が取れざるべし、位が取れると
 きは、ワキは、どの謡曲にても一様のワキとなり、シテは何を謡
 ひても男女の別こそ少々はあれ、位をとりて其のものを謡ひ出す
 といふことは到底叶はざるべし、是れ實に劇職人并に邊土遠郷
 の人に取りての一大不幸と言はざるべからず、然らば其の不幸の
 人に謡曲の福音を授けつくるの道なきかといふに、あり、开は他に
 あらず五流開催の演能を寫真に撮り、これに一々明細なる説明を
 附し、親しく能樂を観るの感あらしむるやうになす事是れなり、
 是れ今回此の能樂寫真を發行する所以なり、且夫本誌の内容は既
 に載せて目次に在り、加筋ならず必要に迫らるゝごとに寫真の改
 善をも加へ記事の件項をも増して益々購覽諸君の便益を謀るに意
 ちするべきなり

發行人謹白

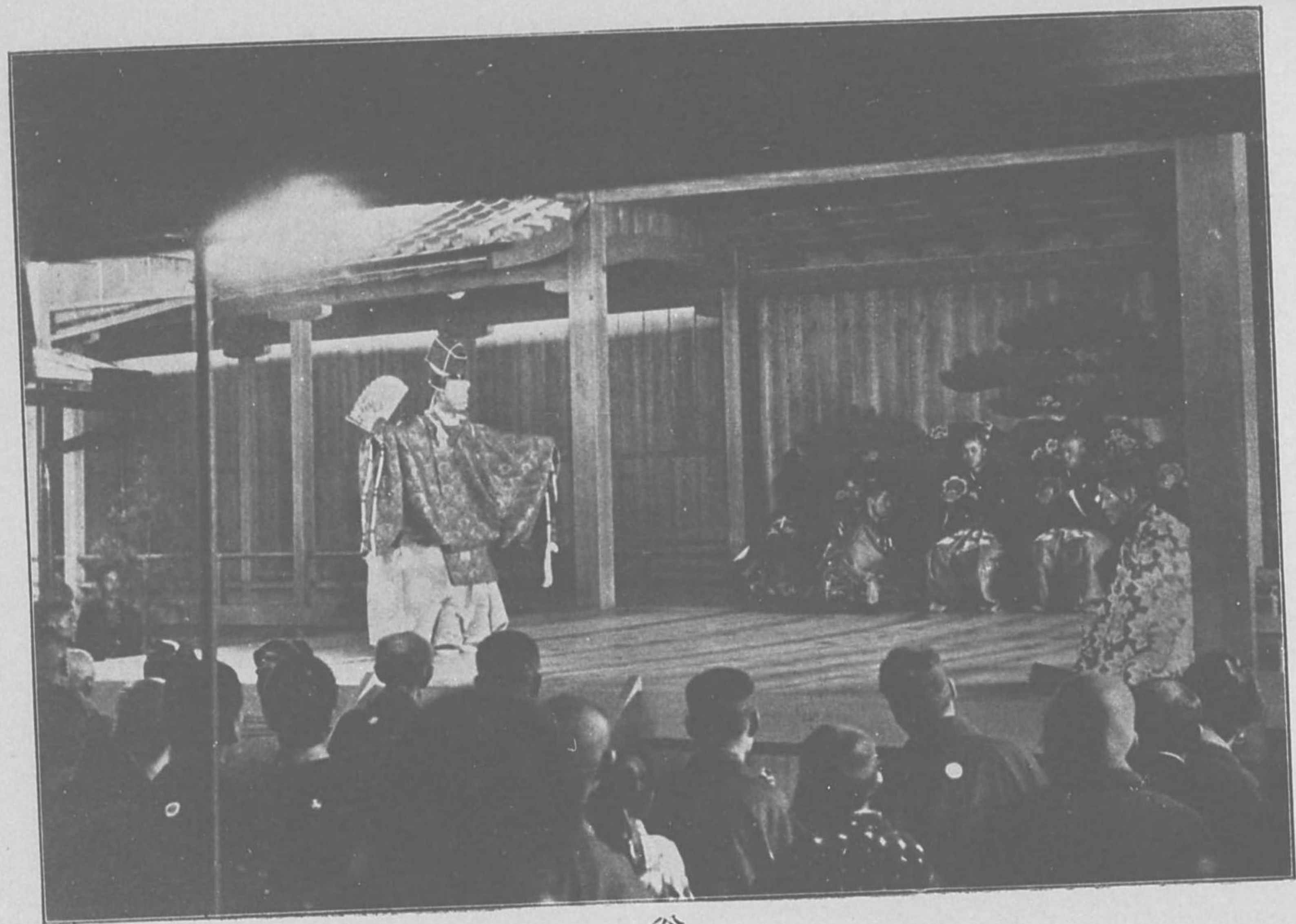
市隨書中



此は贈太政大臣岩倉具視公の
 寫真なり公深く雅樂を好み給
 以維新後一旦衰頹せる能を再
 興せしめられたり乃ち今日の
 盛大を致せるは公の思道推奨
 興りて力あり斯道に携はるも
 の安んを其の恩を忘れて可な
 らんや



岩倉具視公



翁

此の寫眞は「翁」なり、翁の能には、翁と千歳と三番
 叟と三人の役者ありて、翁は住吉大神の御本躰を表し
 千歳は住吉大神の御盛徳を表し、三番叟は住吉大神の
 始終一にして生々無窮なるを表すと説き、又翁は天照
 大神に擬し、千歳は八幡大神に擬し、三番叟は春日明
 神に擬すとも説きて、斯道には神聖中の神聖なるもの
 とす(觀世催)

翁

- 一、翁鳥帽子 一、襟 白 一、着附白厚板
- 一、指 貫 一、蜀紅狩衣(翁狩衣) 一、緞子腰帶
- 一、翁 扇 一、直 面(舞の時白式の尉を着く)

千歳

- 一、直 面 一、折鳥帽子 一、襟 赤
- 一、着附段厚板 一、直 塵 一、小サ刀
- 一、白骨爪紅履(下懸にては狂言方が千歳を勤む)

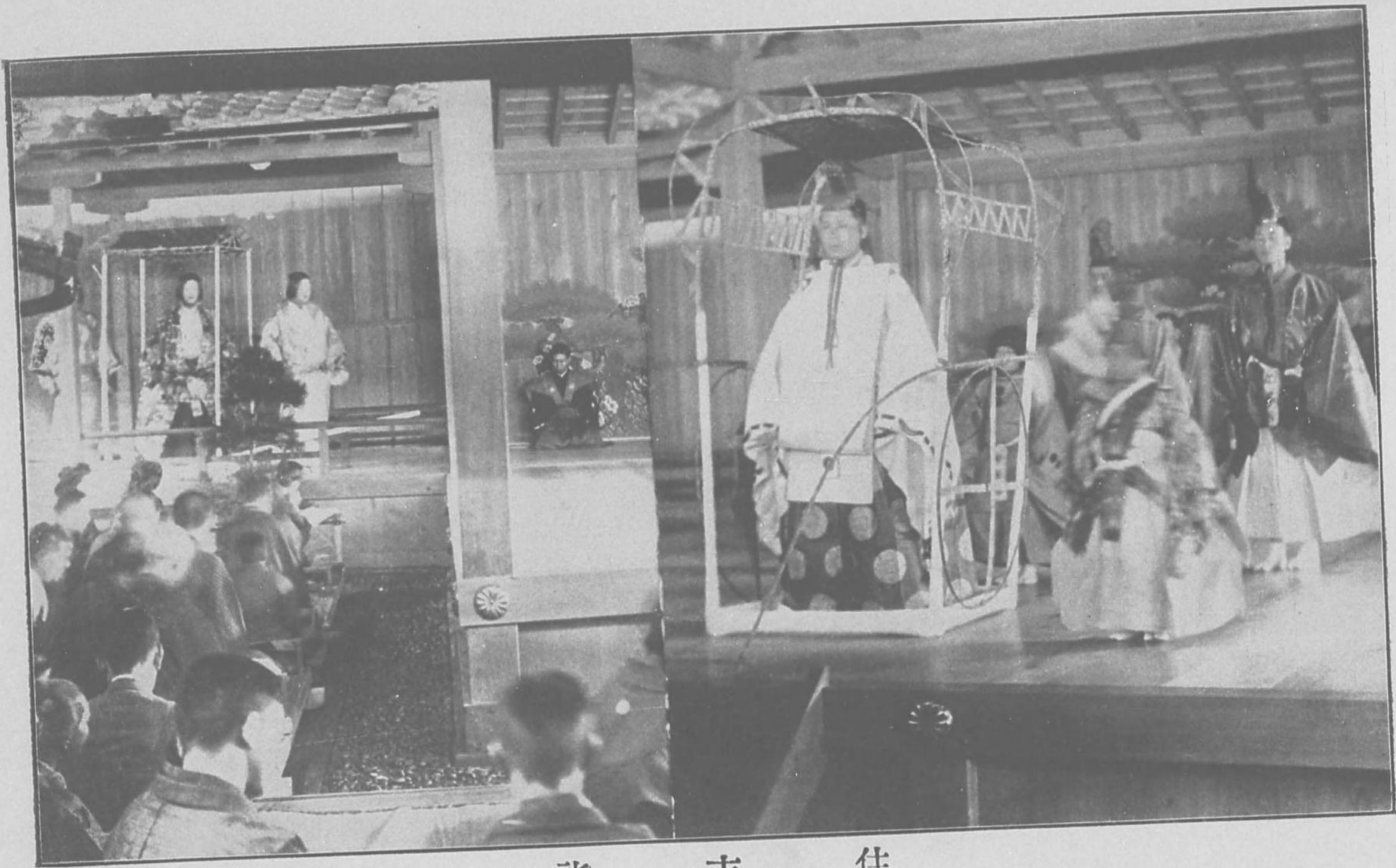
三番叟

- (狂言方) 一、折鳥帽子 一、直垂上下
- 一、着附厚板 一、扇 一、直 面
- (舞の時剣先鳥帽子を冠り黒式尉の面を着け鈴を持つ)

面箱

裝束千歳と同じ

此の寫眞は「住吉詣」なり（金春には無し）此れは源氏ものと稱する中の一にて、光源氏左邊の如き身の上となり須磨の浦に居たる頃明石の入道の娘明石の上を寵愛したるが源氏罪解て京都に歸る時明石の上は播磨に遣し置れたるに源氏の胤を胎し居て遂に姫君を安産せしをもて御禮まゐりに船にて住吉に參詣したるに此方は源氏も今や榮華の身となりて此れ亦住吉に詣りしに圖らず逢さるらせしといふ事を作りたるなり、即ち向つて右の屋形船の中に立ちたるがシテの明石の上にて左右の女がツレ、又左の車の中に立ちたるがツレの源氏にて左右に居るが隨身二人、其後に立ちたるがシテツレの家臣惟光と童とツキたる住吉明神の神主となり（觀世權）



住 吉 詣

此の寫眞は「鷺」なり平家物語の肝文に曰く我が朝に
醍醐天皇と申して聖帝まし〜き（中畧）ある時神泉
苑へ行幸なつて御遊ありしに池の汀に鷺のゐたりける
を六位をめてあゝの鷺とつてまゐれとおほせければい
かでか取らるべきとは思へども論言なれば歩み何ふ鷺
羽づくろひして立たんとす宣旨ぞと仰すればひるんで
飛去らず乃ちこれを捕て御前にまゐらせたりければ帝
大きに御感あつて汝が宣旨に従がうて參りたるこそ神
妙なれやがて五位になせとて鷺を五位にぞなされける
云々とあるが出處なるべし觀世流にては十五歳未満か
六十歳以上ならでは勤むる事が出来ぬ定めなりとぞ

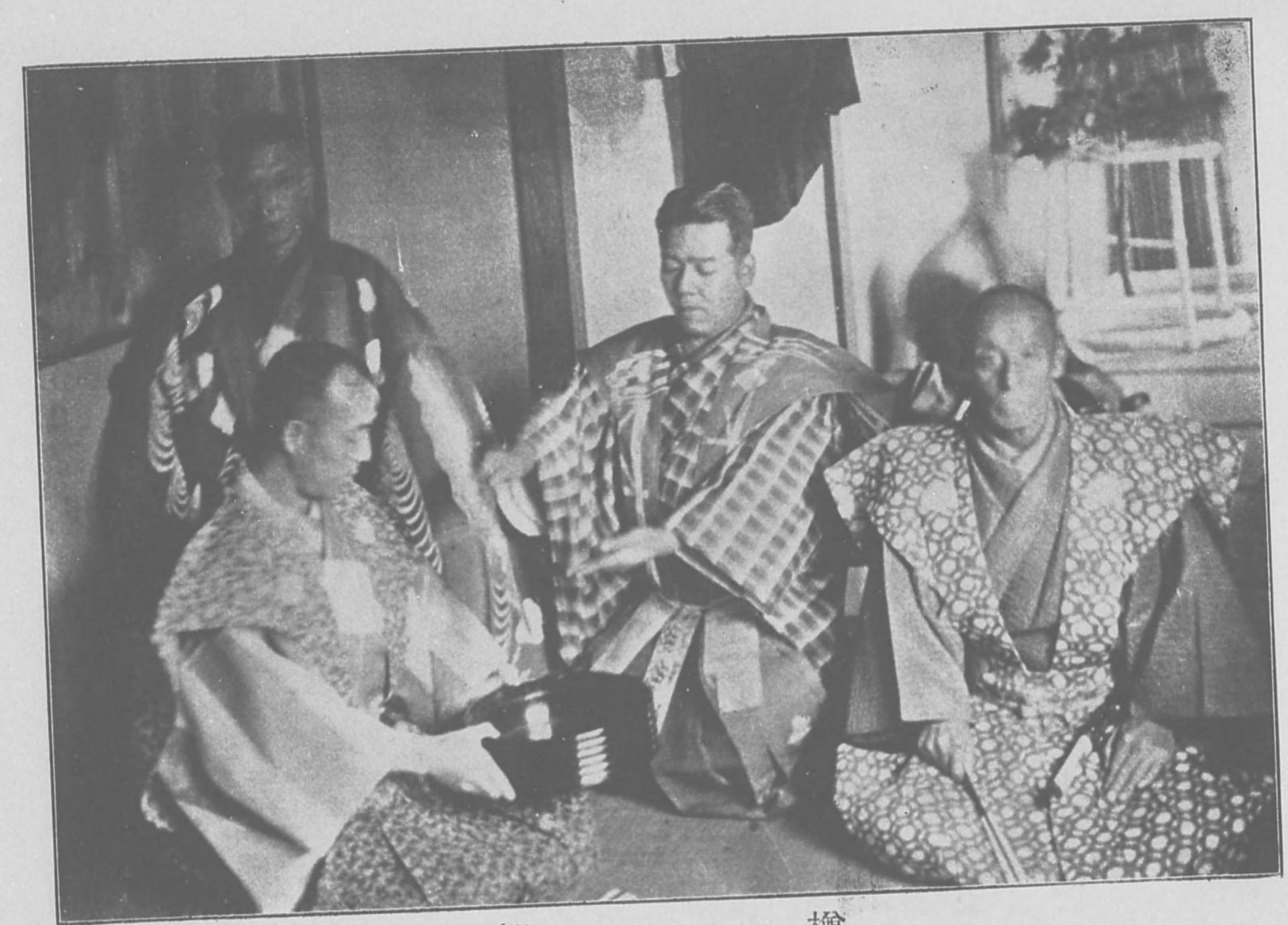
（梅若實の鷺）



鷺

此の寫眞は狂言の「樽髯」なり吉日に髯が髯入をせんとて樽と魚とを舅の所へ土産に持て行んとせしも供がなきゆゑ清六の所へ人を借りて往くと生憎人が居らず因て清六が自ら供人となりて往くと舅の方では樽を携へたる清六を髯と思ひて祝酒を飲ませ太刀を髯引出に出すを眞の髯が見て安からぬ事に思ひ其の太刀を此方へくれといふ清六は已れが貰ひたるなれば遣らぬ、呉れど掴み合ひとなり果は清六が太刀を持って幕の中に這入れば髯は、さんくお仕合せだ樽なりと取て歸らうと樽を携へてスゴ〜と幕に入るなり左方に杯を持って居るが清六、其横に立ち居るが髯中央に酌をして居るが太郎冠者右方に扇を持て座して居るが舅なり

(觀世權)

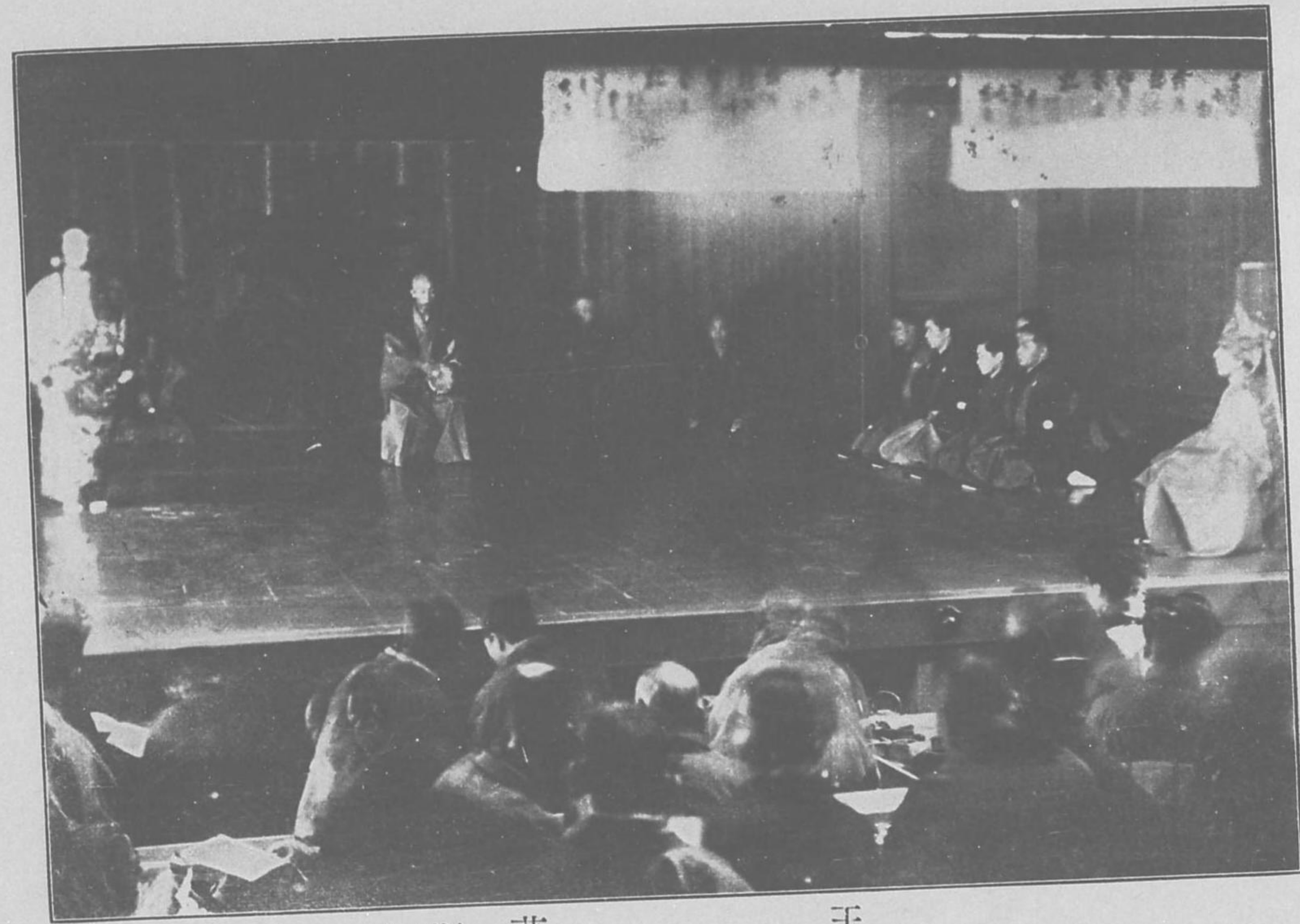


髯 樽



玉 葛 (一其)

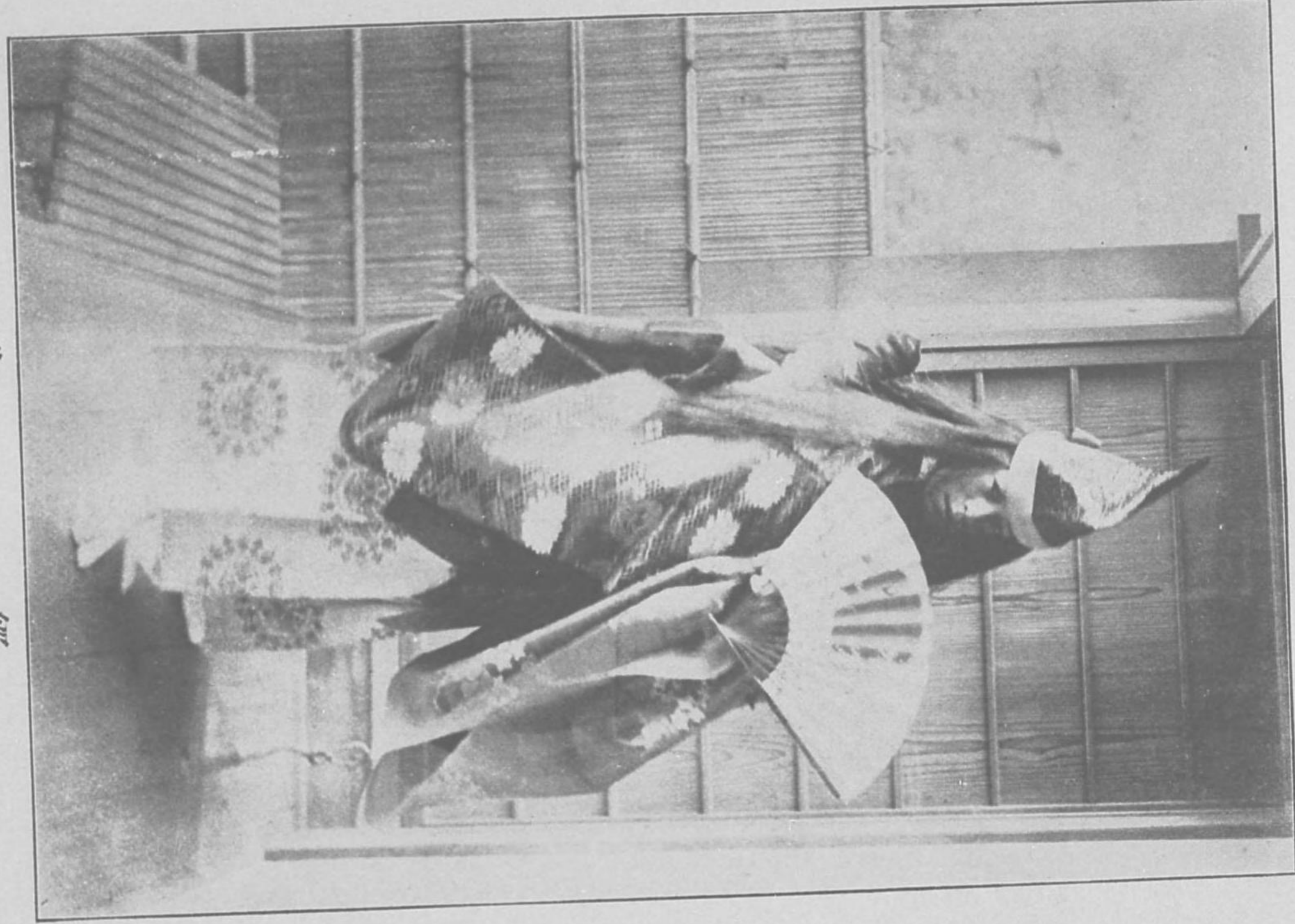
此の寫眞は「玉葛」なり此れ亦源氏物の一つにて乃ち玉
葛の幽霊が諸國一見の僧に昔時の事を語り遂に佛の功
徳に依り妄執をひるがへし心は眞如玉葛が長き夢路の
覺めたる事を作るなり正面の中央に座したるが前シ
テの女にて右の隅に座したるが旅僧なり僧前シテは
「唯頼むぞよ法の入吊ひ給へ我こそは涙の露の玉の名
と名乗もやらす成りにけり」と中入になり「照ささら
めや日の光り」の待論ひが済みてから後シテがいで來
るなり(梅若催)



葛 玉 (二共)

此の寫眞は「玉葛」の後シテなり装束も假面も前シテ
と替りて玉葛の内侍の姿となれば謠ひも其の位を取り
て謠ふべきなり(梅若催)

經政



此の寫眞は「經政」なりシテ經政は經盛の嫡子にて幼少の時より仁和寺御室の御所に童形にて仕へ居たるが十七歳といふに宇任八幡へ勅使として下る時青山といふ御秘藏の御琵琶を賜はりしを壽永二年都落の時一と先づ返し奉つりけるが其の後遂に一の谷にて討死せしをもて大納言の法師行慶が御室の命を蒙り青山の琵琶を佛前に据置き管絃講にて供養したるに經政の幽霊其の供養の難有さに引れて現はれ出で、在りし世の昔しを思ひ起して手向の琵琶を手に取りしらべなむする事を作りたるなり、因みにいふ青山といふ琵琶は嘉祥三年三月掃部頭貞敏渡唐せし時大唐の琵琶の博士廉承武より傳へられて持歸りし三面の琵琶の一なりといふ即ち三面とは玄象、獅子丸、青山是れなり(觀世傳)



小 鍛 冶

此の寫眞は「小鍛冶」なり一條院天皇が三條の小鍛冶宗近に御劍を打つべき由を勅諭あり因て宗近一旦は相槌なき旨を申して否み奉つりけれども氏の神の助を得て遂に御劍を打ち奉つりたりといふ事を作りたるなり向つて左の小飛出の面を着け赤頭を冠り半切法被を着て槌を持ちたるが後シテにて右に直面にて槌を持ちたるがワキの三條小鍛冶宗近なり前シテは童子の面に黒頭を冠り綾箔の着附に水衣を着て居るなり(觀世催)



此の寫眞は「花筐」なり繼體天皇のまを皇子にて越前におはせし照
 日の前といふを御寵愛ありけるが照日の前が暫しの御暇を請ひて生家
 歸りたる間に皇子の武烈天皇の御代を繼ぎ給ふ事となりければ御文と御
 花筐とを殘し遣はされて俄に御上落あり照日の前へなき御別れを悲し
 み遂に狂人となり御形員の品を持って都に慕ひ上りけるに恰も御幸の御先
 にて出逢ひまらせ赤誠届きて舊の如く召仕はるゝ事となりたりといふ
 話を作りたるなり乃ち持て讀み居るが御玉篋にて下にあるが其贈はり
 し花筐なりこれは前シテにて後は狂女となるなり



雷 電

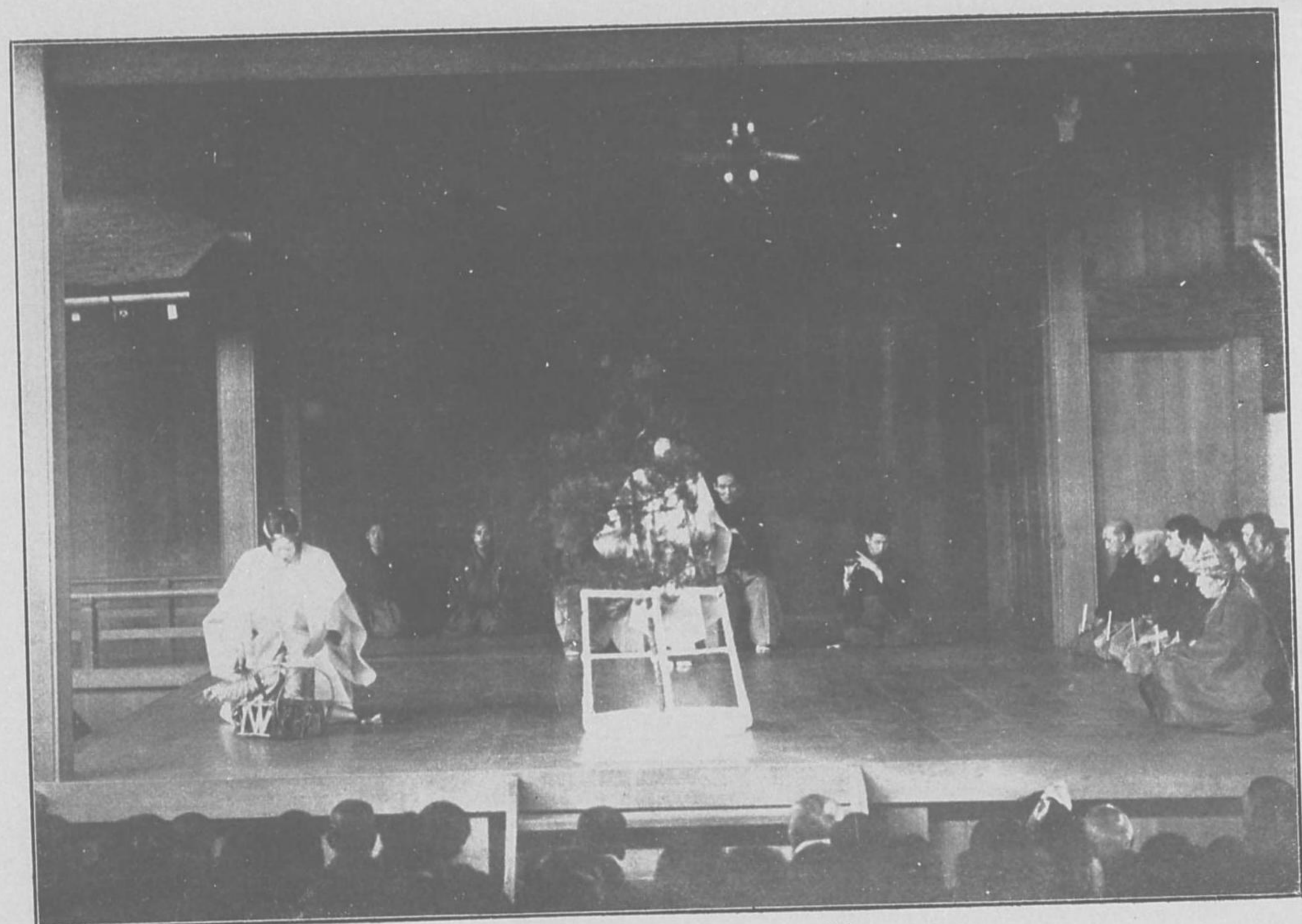
此の寫眞は「雷電」なり（實生流にては來殿と書く）
菅丞相が筑紫にて薨去給ひし後其幽靈が生前の師比叡山延曆寺の座主法性坊の律師僧正の許に訪來り我れ鳴雷となり内裏に飛入り世に在りし時我れにうかりし雲客をば蹴殺すべし其時僧正を召さるべけれど參内して祈禱をなし給ふなど頼みけるに僧正二度までは參るまじけれど三度に及ばず參内せでは叶ふまじといひしに菅公の靈忽ち鬼の如くになりて立去り遂に鳴雷となり内裏の上に鳴りはためきて遺恨を齎さんとせしも法性坊の法力に祈伏せらるゝと共に天満大自在天神といふ勅號を賜はりければ鳴神も満足して立去りたりといふ事を作りたるなり此の寫眞は前シテの所なり

（觀世權）



子 囃

此の寫眞は「囃子」なり但し囃子には番囃子居囃子舞
囃子の三種あり四拍子を用ゐて一番の諸を調ふを番囃
子といひ或る一部分のみを四拍子にて調ふを居囃子と
いひ所作及び舞を演ずるを舞囃子といふ茲に掲出せる
は居囃子なり(山階催)



松 風 (一其)

此の寫眞は「松風」なり平城天皇の皇子彈正尹四品阿保親王の御子中納言在原の行平が播磨守たりし頃須磨にて寵愛せし松風村雨といふ二人の海士の幽霊が現はれ出で、折節來りし諸國一見の僧に回向を請ふ事を作りしなり向つて左の處の汐汲車の側に居るが松風にて正面の松の陰に立ちたるが村雨又右の方に坐りて居る僧が旅僧なり(能樂堂觀世催)



松 風 (其二)

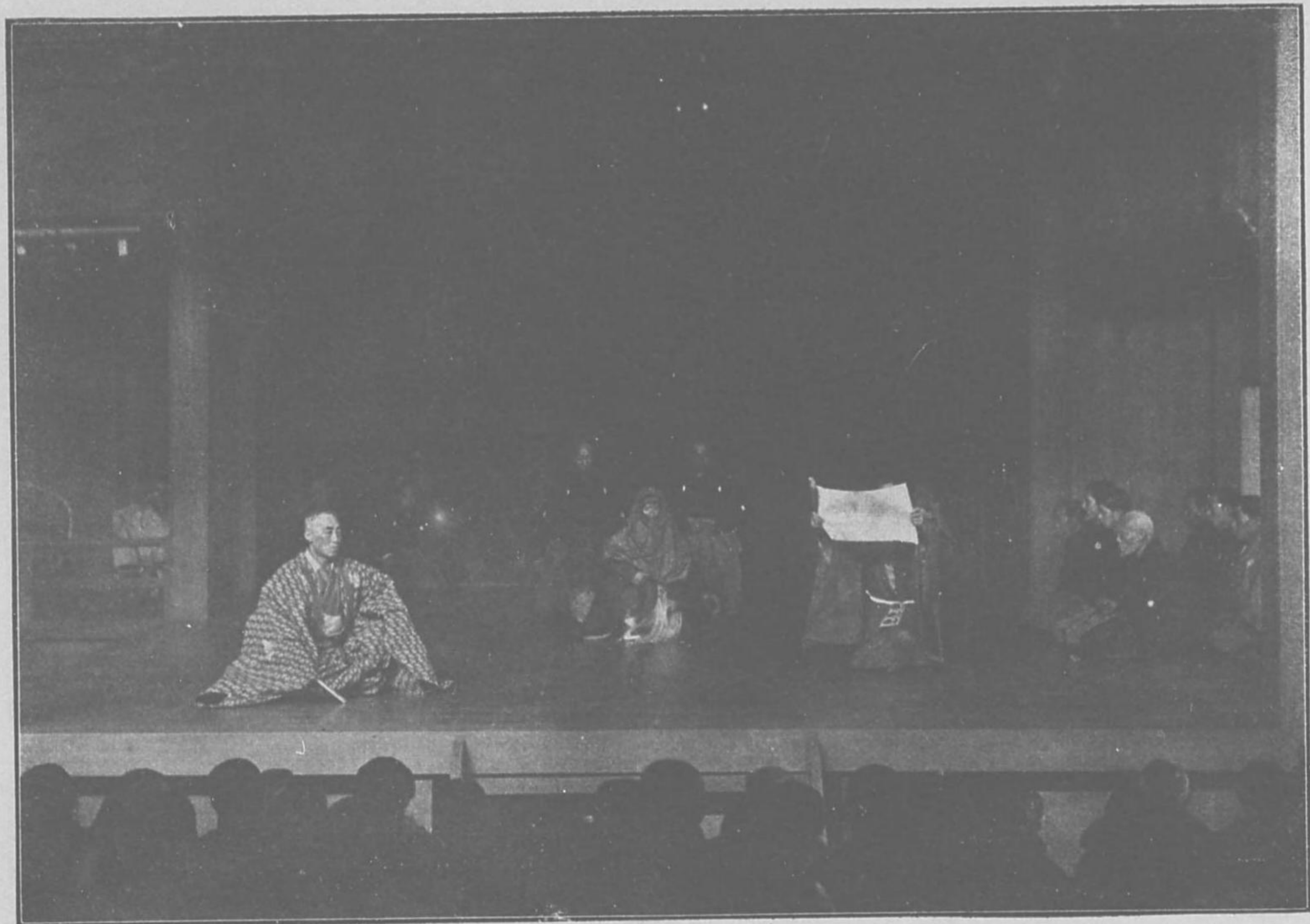
此の寫眞は「松風」の第二にて沙屋の歸り旅僧に身の
上を語り居る處なり乃ち葛桶に腰を掛け居るが松風に
て其左に坐りたるが村雨又右に坐り居るが旅僧なり地
論が扇を下に置き唯子方が大小の鼓及び笛を下に置き
て居るは身の上話しの濟むのを待ち居るなり

(觀世催)

山姥



此の寫眞は「山姥」なり此の語は休和尙の作なりといひ傳へ且つ作の
大意に二義ありとて拾葉抄は記して曰く一には旅人の行き暮て一夜の宿
を借り山姥に逢へるといふ事云々二には山姥とは輪回無窮の縁を名づけ
て山姥といふ山とは世界をいひ姥とは凡夫をいふ一切衆生々死に沈淪す
るをよしめし引の山姥が山回りするといふなり云々後説に據りたる方
が趣味深くして面白きを覺ゆ(山階 催)



寛 俊

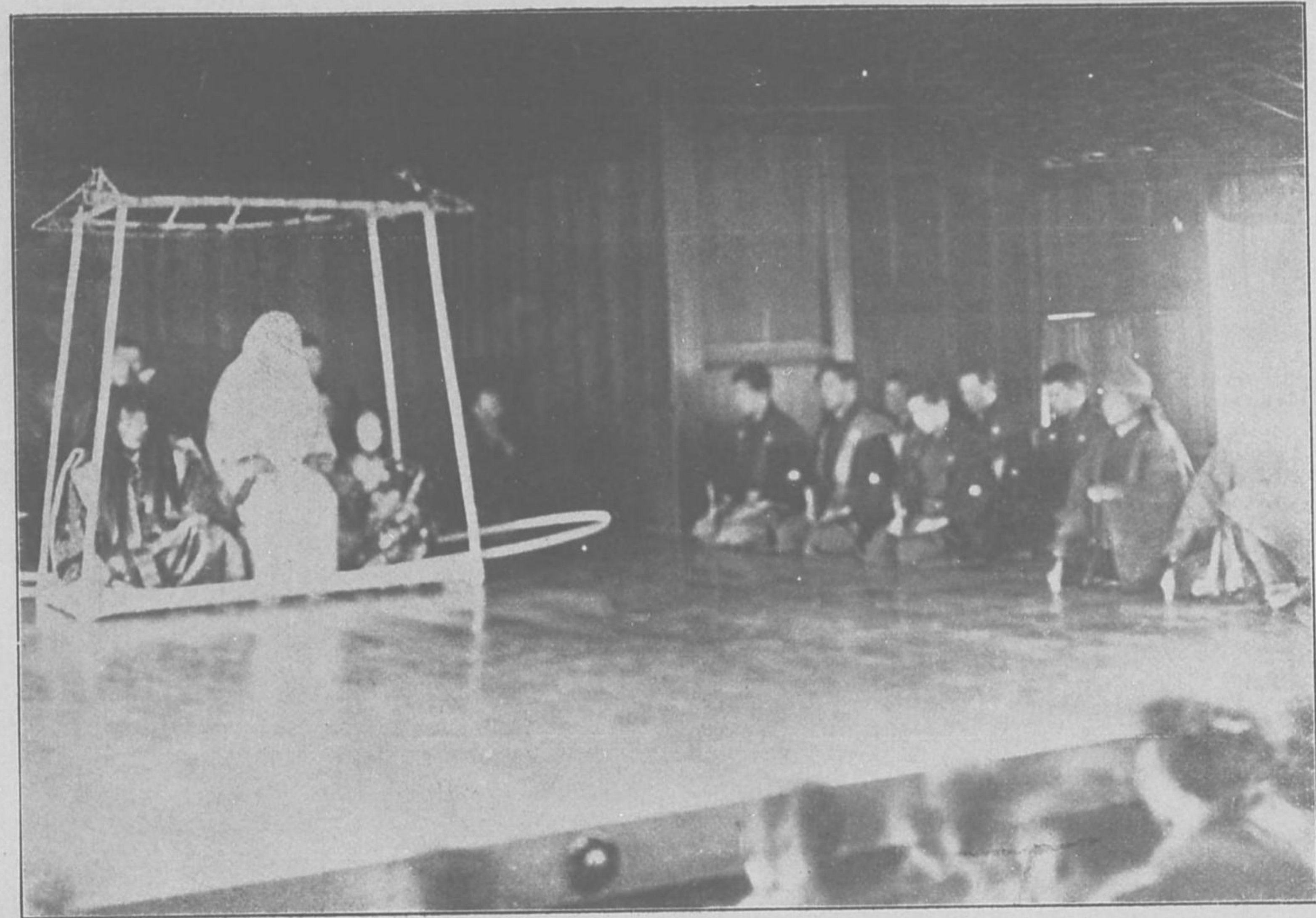
此の寫眞は「俊寛」なり法勝寺の執行俊寛僧都平家を亡さんとて東山鹿の谷に在る我が山莊に同志の人々を會合して計略を密議しけるが其事密に告ぐるものありて露顯し皆々捕はれ僧都と廉頼成經の三人は鬼界が島に流されけるに其後中宮御産御祈りのため國々の流人赦免ありて鬼界が島の中丹波の少將成經と平判官入道康頼の二人は赦免せられしも獨り俊寛僧都のみは誓の網に漏れて取殘されし悲惨の情狀を作らるなり正面の中央に頭巾を冠りて坐したるが俊寛にて右方に赦免狀を讀みて居るが康頼其後に坐し居るが成經左方に素袍を着て座して居るが赦免の使者なり

(能樂堂喜多催)



神 石

此の寫眞は狂言の「石神」なり何誰の女房が夫の大酒に
困りて離縁を取らんと石神に參詣して自から神樂をあ
げ願を懸けて居れるに夫がこれを知り石神に化て今の
夫を依然持ちて居よといふ事を示ゆしつゝありしに遂
に贖神なる事が露見してシテ堪忍して呉れ、女房、や
るまいぞ〜と例の通り追込みにて終ひとなる乃ち左
方に鈴と扇とを持ちて神樂を舞ひ居るが女房にて右方
に假面を横に冠りて立ちたるが夫中央に居るが仲人な
り(觀世儘)



潜 礎

此の寫眞は「礎潜」なり元暦二年の春長門の國壇の浦の
合戦に平家打破られて新中納言知盛が礎をかつぎて海
に身を投げ死したる幽霊の事を作りたるなり前シテは
舟人にて後シテは知盛となりて出で来るなり正面大船
の作物の中央に葛桶に腰を掛けて居るがシテツレの二位
の尼にて左方に鍬形の附きたる黒垂を冠り法被を着半
切を穿きて座したるがシテの知盛右方に座せる女は侍
女、地謡と並びて座したる僧はワキとワキヅレなり

(梅若催)



葛 城

此の寫眞は「葛城」なり傳説に大和國葛城上郡茅原村の役小角といふ行者同國なる金峰山と葛城山との間に往來を作らんと思ひ神々を驅役して岩橋を渡さしむるに葛城の明神は形の醜さを耻かしく思ひて白晝は出で給はざりければ小角打腹立ち呪咀して縛し上げ深谷の中に繋ぎたりとあるを據所として作りしものなり正面中央にあるは葛城山を形取りたる作物にて其の向つて左に坐したるが前シテの女また右に坐したるがアキの山伏なり「神がくれにぞなりにける」にて中入となり「岩橋の苔の衣の袖そへて」の待詔ありてから後シテ葛城の神體となり更に出で来るなり(喜多催)



此の善真は「善界」なり（金春と喜多とは善界と書き金剛は是我意と書
く）大層の天狗の首領善界坊が日本に渡り來り佛法を妨げんとすつ愛
岩山の太郎坊の許に至り其意を通じ太郎坊の案内にて比叡山に赴き善界
坊大いに佛法の妨害をなはしめけるも佛力神力に敵し得ず遂に敗北し
今より後は來るまじと言ひつゝ、雲路に入て姿を見せずなつたりといふ事
を作りたるなり此所に掲げしは後シテが大ベシミといふ面を着け赤頭に
大兜巾を戴き半切を穿き狩衣を着羽團扇を持ちて立たる所なり前シテは
直面に兜巾を戴き水衣を着し大口を穿き篠掛を懸け珠數を持ちたる山伏
にてソレの太郎坊も亦同じ姿をして居るなり



◎ 謠 方

謠といふものは、傍から聞くと易しいやうに思はるゝが、決して易しきものにあらず、ざりと始めから難かしいものと思ひて取りかゝるときは、氣づくれがして一句も謠へるものにあらず、然らば、どうしたら宜しからんといふに、最初は無邪氣に聲を思ひきり出して謠ふがよし、中には節を覺えんとて、目を皿のやうにして胡麻節ばかり見ながら少しにても下て節が附けてあると下て謠ひ、上げてあると上げて謠ふものがあれど、是れ大いなる心得違ひなり、胡麻節を拾つて謠ひが諷へるものなら月謝を拂つて師匠に教へて貰ふ必要なし、他の學問ならば字引と首引で研究すれば、少しは文字が讀るやうになれど、謠ひばかりはさういふ理窟にゆかず、なんでも師に就いて聲の出し方節のあつかひぶり、心持のある所、氣合のかゝる所、すべての調子を學ばなければ成らぬものなり、尤も此の廢したくなつた時が一段謠ひが上る時期の來りたるものなれば其の時期を取逸さぬやうに、雄氣に打勝つて更に奮發心を振起さざるべからず、是れ謠ひは學ぶ人の一大覺悟として記憶し置くべき一言ぞかし、いでや本事たる謠方の手引に取かゝらん、まづ謠曲を學ばんと思ふ人は、五十音を暗誦し置の必要あり、如何となれば、口を働かす上に於ても、音聲を發す上に於ても皆五十音に基因せざるはなければなり今左に圖を掲げて之を示さん

喉音：ア — アの段 — イの段 — ウの段 — エの段 — オの段
 イ — といふ — といふ — といふ — といふ — といふ
 オ…ア行とスふ

牙音…カ	キ	ク	ケ	コ…カ行といふ
齒音…サ	シ	ス	セ	ソ…サ行といふ
舌音…タ	チ	ツ	テ	ト…タ行といふ
舌音…ナ	ニ	ヌ	ネ	ノ…ナ行といふ
唇音…ハ	ヒ	フ	ヘ	ホ…ハ行といふ
唇音…マ	ミ	ム	メ	モ…マ行といふ
喉音…ヤ	イ	ユ	エ	ヨ…ヤ行といふ
舌音…ラ	リ	ル	レ	ロ…ラ行といふ
喉音…ワ	キ	ウ	エ	ヲ…ワ行といふ

以上の五十音を常に、或は縦にアイウエオ、カキクケコ、サシスセソ、タチツテト、ナニスネノといふやうにワキウエヲまでの十行を能く讀みて暗誦し、又其の次は横にアカサタナ、ハマヤラワ、イキシチニ、ヒミイリキ、ウクスツヌ、フムエルウ、エケセテネ、ヘメエレエ、オコソトノ、ホモヨロヲといふやうに、絶えず能く讀みて暗誦すべし、此の五十音が縦横自在に暗誦が出来たら、圖の上に書いてある音に就いて發音の工合を研究すべし、例へばアイウエオは喉音とあるから喉から出る音であるな、カキクケコは牙音とあるから牙によりて發する音であるな、と齒舌唇の音に至るまで、さまざまに唇、舌、牙、齒、喉を練りて發音の工合を研究すべし、人によりては牙の音に特別に力が入るがあり、タチツテトの舌の音に力が入るがあり、其の他喉、齒、唇の三音に至るまで、人々の持前にて力が入るがあり、是等は他人の注意を能く守り自から矯正して耳立つ發音の癖を去る事に勉めざるべからず、たびびと、旅人(タミミトといひ、ほど(程)をホンドといふなど特別の所に力を入るゝがためなりまた濁音といふがあり

ガギグゲゴ ザジズゼヅ
 ダヂヅデド バビブベボ

の四種これなり、此の四種の中ガギグゲゴの五字は或るべく少し鼻の方へ抜して軽くいふやうにすべしとなり、たとへばゲニゲニ(實々)といふも上のゲニは本濁音にいひ、次のゲニは鼻へ少々ぬかして輕げにいふやうにすべしとなり、以上四種の濁音の外に尚ほ半濁音といふがあり即ち

バ ビ ブ ベ ボ

の五字是れなり、これは上からの掛り工合にて斯様に發音せねばならぬやうになるなり、譬へば「兜巾」といふは五智の寶冠なり「よつびいて發つ矢に」の如きなり、又を文字をノと讀みは文字をタと讀み、を文字をトと讀み、い文字をチと讀み、又所によりてはニと讀み、は文字をナと讀むことあり、其例を示めさば

王城の鬼門ノ(を)守り(兼平) 今日タ(は)日もよく候程に(藤戸)

かゝる時節ト(を)伺ひて(舟辨慶)たま(佛意)にあひながら(源氏供養)

曠(悲)のほむらは身を焦す(葵上)然るに勾踐ナ(は)舟辨慶

右等は讀方といふよりは讀讀方といふべきなれど序なれば、此所にいへるなり(未完)



謠の手引



此れは新規に謠曲の稽古を初めやうといふ人が先生の所へお弟子入りをなさる前に一と通りお読みになつて謠曲といふものは斯うしたものであるかといふ事を御承知になつて置くやう、言はゞ下稽古と申すやうな資料に供へんとの微意であります

右の通りの微意でありますから已てに稽古をはじめておいてなさる方でも此れから次に教へてお貰ひにならうといふ、やはり下稽古の材料に御覧あらば必ず御便益であらうと信じます今回は、まづ觀世流の分をかゝげますが追々に番數をも加へ寶生流、金剛、金春、喜多の諸流をも此の例に依て載せて諸君の御便益に供します

◎在來の切星の印 ○ヒラク印(ヒラクとも又ワケテ云とも、引上ゲテ云とも申します、中には起るなどいふ人がありますが是れは無いとなへ方です)(ウ)は打切り(ヤ)(ヤア)(ヤヲ)(ヤヲハ)此れは拍子の方の印でありますが謠の引き方にそれ〳〵區別がありますから其の心持で謠はなければなりません、此の事は其の場所〳〵て申し上げませう

高砂

次第ツヨク今を始の旅衣◎(ツヨクとは強吟といひ謠ふ聲の剛く雄々しさをいふ、さて高砂は脇能の標準となるものであります、かやうの祝言は高尙にツヨク、淡やかに諷ふをよしと申してあります、此の一句は序てありますればサラリ目、さて衣のふをアツカフやうに下にとります)

〳〵(返しは破てノル心で謠ひます、今をとハツて、始と下にとりのを少しウカせて、旅ごろヲ、とマワシて、そのマワシのウミ字から下に取ります、尤もツヨク吟てありますからヨワ吟のやうに、ドカリトとは下げませず内に取る心持で謠ふが宜しいやうです)日も行末ぞ久しき(これは急でありますから矢張氣合を込めて謠ひます、日も、のをも少しウカせて、ゆくのゆを落し、くウーと回し少し持て、末ぞと、ぞの字をウカせひと落しと回し、しいと振てきいと引きます、上の返しから日もの間に一印のあります直ぐつゞけて謠ふやうにとの符牒てあります、又ひさしきの四字は折合てユルリ目に謠ひます「ツキ詞」抑是は九州○肥後の國◎(九州のヒラキで息をついて宜しいから高尙に幅を付けて謠ふ)阿蘇の宮の神主友成とは○我事也◎(これを名乗りといふ、重き神職なればシツカリと謠ふ)我いまだ都を見ず候程に◎此度思ひ立ち都に○上り候◎又よき○次なれば◎播州高砂の浦をも一見せばやと○存候(我未より此れまでを詞といふ、名乗より少々中音に取りて謠ひ、一見せばやとにて引締め、存候を廣く大きくいふ、是れは能ならば兩手を前に出して達拜といふ事をするからであります、素謠でも總て能の心持を以て謠はなければ面白くは聞かれせん)道行「旅衣◎(ごろも)と引かぬやうに謠ふ、これ觀世流の節です、他の流義は此所に切星がなく、ごろも一末はる〳〵とつゞけて謠ひますやうです)末はる〳〵の都路を「ウ」(こゝに打切と申す鼓の手がありますから、ぢーを〳〵と引きます、但し、ぢーよりもをの引きの方を少し長くします、それから、みやこぢをの五字は少し折合つて靜に謠ふが宜しいです)〳〵(返しはサラリ)けふ思ひたつ浦の浪◎(またサラリ)船路長閑き春風もいよくかきぬらん跡末も「ウ」(トク)〳〵と謠ひ、きぬらんらの所に下があつても

只らの一字をアツカフ位にして下音にせず謠ひ、あ。と。す。ま。も。は。打。切。
があるから折合て謠ふ、此所までを序とします。い。さ。白。雲。の。は。る。む。ば。る。
と。さ。し。も。思。ひ。シ。イ。播。磨。が。た。高。砂。の。浦。に。着。に。け。り。い。さ。の。さ。を。澄。ん。で。濁。
らぬやうに、又、思ひしの下もヨワの下のやうに下げず、着にけりの下
も同断です、扱、いさ白雲からが破て、高砂の浦から急です、此の序破
急といふ事は何所にも先づあると心得て宜しいです、道行は讀んで字の
如く道を行くのですからサラリと謠ふものです、又、播磨がた高砂、と
たの字が重りますからゴチャ／＼にならぬやう謠ひ分けなければなりま
せん、去りとてワルやうにしては、いけません。返しは折合て靜に
謠ひます。一セイ二人「高砂の」シテは老翁ツレは老女、しかもシテは
後に住吉の明神となるのでありますから十分に位を取て調子を高くせ
ず、氣合を籠めてハハのある低き音にて切れ目なくドツシリと謠ふ、た
アのフリも耳立ぬやうに引くのです、かアの回しも高尙に大きく、の、
引きもフワリと消えぬやうに、松の春風吹かれて松のフリ、の、入回
し、く。れ。て。の。フリと入回し、引も皆詰りませんやう、汪深に謠ふ、尾上
の鐘もこのフリもクリも入回しも、引も矢張わうやうに謠ふ響く
なり、この回しもフリ引回しも小さくならぬやうに、且つ、リの回し
は大きくシツカリと謠ふツレ「波は霞の磯がくれ」(老女なれども位を
シテに譲るため、少し調子を高くしてサラリ目に謠ふ、クリも入回しも
同断サラリ目に)二人、音こそ鹽の(此の二人はシテとツレなり)みイ
ちひイ、なア、ア、ア、れエ(ひイ、の所の章を俗にフリ引きボチ
と稱します、ひイ、と大きく回はすやうに謠ふのです、なア、ア、ア、
れエは回しが二つ續きます、それゆゑ上の回しを小ひさくして下の回し
を大き目にするのが宜しうございます、それからア一の二といふ印はウ

羽衣

◎在來の切星「ウ」ヤ「ヤア」「ヤヲ」「ヤヲハ」以
上は拍子の手〇ヒラキの印

ワキ一セイ、ツヨク「風早の」ツヨクの事、高砂の所を見玉へ、これは漁
夫ゆゑ大臣ワキや高官の神職のやうに高尙に謠ふには及ばず、幾分かサ
ラリの方です(三穂のうらはをこ船の)(入回しは二ヶ所ともシツカリ
大きく)浦人さわぐ(浦人のクリ入回し、くの引皆チビマらぬやうに)波
路哉(この回しもフリ引回しも大きくシツカリと)サシ、是は三保の松
原に◎はくれうと申す漁夫にて候(これを節名乗りと申します、此のサ
シは所謂サシ言であります、サラリと重くなく謠ふ、松原に、のらにの
二字は二字落といふのでありますからア一といふやうにアタリを付け
て謠ふのです、候も、そららふといふ工合にアタリを付けるのです)立
衆、萬里の高山に雲忽に起り◎(立衆とはツレの事を申します、然し能
にはツレが出ますが素謠には出ませんからワキの役に當た人が謠ふので
す、矢張サラリ目にして、起りのりを一字落にリイとウミ字を出してシ
ツカリと)一樓の名月に雨始て晴り◎(サラリ、月のつを含む、此の合
む音は、口を閉ぢて聲を鼻に抜かすと出ます、晴りのりは一字落てすか
らリイとウミ字を出してシツカリ謠ふ)實長閑なる時しイもや◎(時しイ
の回しの所に下が付いて居ますがドカリと下げてはいけません)春のけ
しき松原の◎(サラリ)浪立つと朝霞◎(かすみのみをみいとシツカリ
振て語尾に心持ウキを付けるこれは下の月のハリの豫備のためです)月
も残りの天の原◎(月をハッても下を下げす只もヲとアツカフやうし、
天のののに少々ウキを持たせて原のは落し、らアと回はす)及びなき身の
詠めにもヲ◎(ながめのめのゴマ節が下がつて居ても下げずにウキを持
せてにもののを落し、もヲと回はす)心そらなるウイ氣色イ哉アあア「ウ

「ヤ」(心の所に、本によると)このやうな章がありますが、これはゴマ節二つを合せた印であります、初心の人には回しの一種かと思ふのもありますから一寸申して置きます、そこで、そのらにウキを持たせてなを落し、る。ウ。と回して少しモタセ、けしきいとさの字を回し、かなアアとフリ引と回しを誦みます、ウ。ヤは鼓の手です(下歌(これは下音に取るのですがツヨ吟では、ヨフのやうに下げず下の上ぐらゐで誦みます、この下歌は少し閑かに誦ふです)忘れめや山路を分て清見がた(め。エとフリ、やに少しウキを持たせてやを落し、まアと回し、分のわにウキを持せてと下げ、清見がたを元の聲に直し、がたのたに少しウキ心をつけて置きます、これは次ぎのはを落さんためてあります)はるかに三保の松原に(は。を落しる。をウカセか。を落しに。をウカセます、又松原のまつ。つ。を下げましてに。を元の聲に直します)立つれいイヤ(つ。をウカセれを落し。いと回して下に聲を取て。やと誦みます(通はん(かよにウキを取りはを落し、ん。と回します)〜(返しはたちと下にしてつれいとウカせて。や以下を下げます)上歌、ウヤ(上歌は聲を上にして誦ふのです、ウヤは鼓の手)風むかふ(いざぎよく)雲のヲうき波たつと見いてエ(ウ)(大さくウキやかに誦ひまして、打切がありますからみての二字を引きます、これもての方を少し長目に引きます)〜(返しはみてを引かずに誦みます)釣せて人や歸るらん(「ヤア」(まつすくに誦ふ)までエしいばし春ならばふウくものどけエき朝風のヲ(ウ)(までてのをクリ、しばしのしを入ります、此の節をクリ入りと申します、しの入の下のばをアツカフやうにしないと入りがシツカリしません、のどけエのけの回しから折合を付けて聲を下音に取て靜に誦みますこの章はベク章と申してモツにはあらずウミ字の出るぐらゐまで引く

印です、かぜのせならばせ。エといふ程の事です(松は常磐の聲ぞかし(松の所にハルとあつても強吟ですから著く聲をハラずとも宜しい又、ぞがしのぞの下も前に申す通りドカリと下げるには及びません)波は音なきイ朝なぎに(波のハリ上にいふ通り特別にハルには及びせん、なきのなぎにはぎ。いとアタルやうにして心持下音に取るのです)釣人おほき(釣はオサヘルといふほどでもありませんが少しまづオサへ氣味にして誦みます、おほきは。おに少しウキ心をつけてほを落します)小舟つりとウカせてびを落し、とヲいと回して少し引いて、おほとオサへ氣味にして。とウキを持たせ、ぶと落し、ね。エと回し、ね。エのウミ字から下げ折合を付けます)ワキ詞「我三保の○松原にあがり(浦の氣色をながむる所に(虚空に花降り(音楽聞え(靈香(四方に薫ず(是唯事と(思はぬ所に(是なる松にうつくしき衣掛れり(漁夫が三保の浦に上つて浦の氣色を見て居ると天から花が降て来て、音楽が聞えて、いふに言れぬ美き香が四方にブン〜として来たから是れ尋常の事ではない何か不思議があるのであらうと思つた處が果せるかな此所にある松に美麗な衣が掛つて居たといふ心持をいふのです其の心持を以て誦はなければ、いけません)よりて見れば色香妙にして常の○衣にあらず(如何様取て歸り古き○人にも見せ(家の寶となさずやと(存候(虚にならぬやう、文句に應じてシツカリと誦ふ)シテ女詞「なふ其衣は○此方にて候(何しに○召れ候ぞ(なふは遠方から呼掛けるのでありますし、若いうつくしい天女ですから、聲をきれいに、上から出して誦ふのです、お能ですとワキが舞臺に居て、シテが切幕のあたりに居るのでありますから素誦でも其の心持で、せかずに、うつくしくノビ〜とはなければいけません

ワキ「是はひろたる衣にて候程に取りて〇歸り候よ(たゞサラリと返答の心にて)シテ」それは天人の〇羽衣とて〇(上から、うつくしく高尚にうたふ)たやすく人間にあたふべき〇ものにあらず(なだらかの中に氣合のぬけぬやう文句をよく味ひてうたふべし)本のごとくに〇あき給へ(すべてヒラキの聲を上に取りいふなり)ワキ「そも此の衣の〇御ぬしとは〇衣の主はだれてあるかと思つたらうといふ心を持つていふ)扱は天人にて〇ましますかや〇(持主は天人であつたか、その義ならばといふ心持で)さもあらば末世の奇特に〇留めあき〇國の寶と〇なすべき也〇衣を〇返す事あるまじ(天人の所有物ならば、いかにもめづらしきものゆゑ決して返さぬといふ心持でうたふ)シテ「悲しやな羽衣なくては飛行の〇道もたえ〇天じやうに歸へらん事も〇叶ふまじ(六聲をことさらに作くらずして、かなしみ、なげく心持をうたふなり、かういふ所が、むつかしいのでありますから、よく、意味をあぢはつて、工風しなければいけません)去りとは返し〇たび給へ(返してくれと頼む心を持ってうたふ)ワキ、カ、ル「此御詞を聞くよりイモヲ〇(よわ吟て謠ふ、氣の毒であるなど、いふ心は少しも持たず、天人の羽衣とはめづらしいものを得たワイと心に嬉しく思ふ心を持ちて)いよ、伯良力を得(氣合をこめて虚にならぬやうに)詞、本より此の身は〇心なき〇天の羽衣〇とりかくし〇カ、ル、かなふまじとて立のけばア(詞は、よく文句を味はひて聲をつかふものなれど、粗略に軽く謠ひとはさず、虚にならぬやうと油断なきやうに、さうして、かなふまじとてからの節になる所も木に竹をついだやうならないやうに工風して謠ふ)シテ「今はさながら天人も〇羽ねなき鳥のごとくに〇あがらんとすれば衣なし(悲しみなげく心持を失なはぬやうシットリと、さうして、天人もヲの一字落しも、ぞんざいで



節くらべ

京坂十着の觀世流には上音と下音とがありて東京の如き中の音がなしと聞く

觀世流には強のカングリありて柔のカングリなく寶生流には柔のカングリありて強のカングリなしといふ

喜多流でシヲリといふ節を觀世流にてはクルといふ

觀世流の松風のロンギの「松の村立かすむ日に鹽路や」の鹽路の路の下と

なだグリの「人にや」のにやの下を中に落して諷ふ人と下に落して諷ふ人

とあるが、あれは兩方とも下に落すのが宜のだといふ事である

同じく觀世流の舟辨慶の「其時靜は立あがり時の調子を取あへず」のあへずを下ぐる人と、印の下字に拘はらずして下げずに諷ふ人とあるが

此れは下ぬ方を可しとするよしなり

マハシの事をヲル又はカギなどいふ人があれどそれは宜しくない稱へ

である是れは矢張マハシと稱ふが正しといへり

寶生流の節の事を書いた本に、ならぶ節これをたけくらべといふ「戀と

いふども「うらみといふども」辰巳上りハラヌにはあらず横の聲にて張るべし又功者過ぎて乙入るは凶なりというてあり

又同じ本に、總じて一聲打上げまては節も賤しくなきやうにとくくと

謠ふべし二句ツレにても粗相あるべからず謠留めシテ、ツレ心得あるなりとあり

ない、或る古老の話に玉葛の「響の灘も過ぎ思ひにさほる方もなし」の「なアしい」の引きは四番目に用ふ折りは打切りなしにするので引なしに誂へど三番目に用ふ折りは打切りがあるために「なアしい」と引くなりと教へられたり此の外かゝる類多し

小書付きの能の時は平生誂ふ時と異ふ誂ひ方をする事あり一例を示めば觀世流の八島の「其折しもは引鹽にて遙に遠く流れゆくを」のを文字を引流といふ小書のあるときは一字落しに誂はぬとぞ

一字落すは回す節と同じやうになるものなり

そも此うたと申すは そも此うたとすは (以下次號)

小節の心得

無暗やたらに達者ふりて師傳にもなきアタリを付けて誂ふ人あれど餘り澤山アタリを附くると節が零細になりて却つてノビノビとせず賤しき誂ひとなる恐れあり、故に小節は師傳の外自分勝手に附けぬやうにするが宜し

音曲にさのみ節だてすべからず有るべきまゝに何となくして

そも其のやたらにアタル弊は初心には無くして稍節あつかひが出来て来た人にあり注意すべき事どもなり (未完)

姿勢の心得

誂曲を誂ふには第一姿勢を端しくして坐るが大切なり、姿勢が歪みて居ると自然に聲も歪みて出づるものなり、素人の半熟先生には間くの字な

りにて誂つたり胡坐をかい誂つたりする向きがあれども、是れ大いなる誤りなり、聲を丹田より出さんとするには横になつたり胡坐をかいたり臥て居たりしては逆も出来るものにあらざ、随分黒人の地に坐つて居るものを見ても如何はしき姿勢の先生なきにしもあらざ謹しむべき事なりかし、其の坐り方の秘傳は第二號に説くべし (未完)

扇子の心得

誂曲を誂ふには必らず扇子を携へざるべからず、是れ禮義なり、中には有合せの煙管や又は火鉢の火箸を持ちなどして誂ふ輩あれど、其れらはほんの力種にするだけの事にて決して禮にあらず、されば五流ともそれ寸法および骨又は模様は模様に定規ありて、いづれも之を携さへしめんとせり五流の書摸様寸法は次號に詳記して参考に供すべし

素誂着坐の心得

近來誂會が盛んにありて毎々拜聴する事なるがシテ、シテツレ、ワキ、ワキツレなどの着坐順が頗る不規律にて誂會の神聖を滑稽に歸せしむる事随分あり、まづシテワキ二人のものならばワキは左の方に坐しシテは右の方に坐すものと心得べし又シテツレがあらば、ツレはシテの次席に並びて坐し、ワキツレもワキの次席に坐すべし攝待、七騎落、草紙洗、大原御幸の如き役人の多きものは其の順なか／＼面倒なり委しくは次號に説かん (未完)

質問應答

問 觀世流の謡ひの机に月と瓢箪とが刻てありますが、あれには何か
謂れのある事ですか (愛觀生)

答 あれは觀世九世の黒雪といふ人が詠んだ歌に「わが宿は風をまが
きに露しき月をうたへる瓢箪の聲」といふのがあります、それ
に因て月と瓢箪とを附けるのです、てありますから机も月の方
を右にして据えるのが順と思ひます

問 謡曲の文句には大抵候といふ字が遣つてあるが、中には候なし
のがありますか 穿鑿老人

答 あもしろいお質問です、候なしは澤山はありません寶生流の大蛇
と觀世流の身延には蓋か候が無かつたと記憶して居ます

問 富士太鼓に「しうかうが手を出しはるうが泪にてもとむべきも
の」といふ文句がありますが、どういふ事ですか 字探散士

答 和漢雜笈或問といふ書に斯う書いてあります、曰く此の事は黃氏
日抄の追補卷の十一の廿三枚目に見えたりしうかうは秋猴也はん
ろうは班婁也魏の代に班婁といふ女其夫、君の用事にて軍役に行
かんとすると其の別れを悲しみ血の涙を流して留めければ夫病
に推託て止まれり此れを人の夫をとむる故事に引くなり又しう
かうは楚の國の巫山といふ所は猿の名所なり其の猿秋になれば左
の手三寸長く伸るとなり是をたとへて夫を留むる手を長く出だす
を巫山の秋の猿が手を長く出だすが如しといへるなり云々
問 然らば今一つ問はん蟬丸に「實やかうくわんもとひをさきり半だん

に枕すと中華のせいしがいひける云々」とあり此の意は何といふ
事てあります

答 なるほど此れも人の能く不審する事として能く確實に解を下した
ものを寡聞にして未だ見ませんが右の和漢雜笈に歴史通考といふ
書を引て斯う書いてあります (以下次號)

能と謡の一と口評

觀世宗家の納會(十二月六日)

◎脇能和布刈 シテ片山九郎三郎ワキ寶正新 シテは關西の鎮臺、ワキ
は當時若手中並ぶものなき東京一の立てものとして、まだ人の集りの少な
き初番には惜き役者ぞろひとの評判、二人とも能く出来ました◎二番目
忠信 シテ山階徳次郎、ワキ大友信安、徳次郎には適り役にあらざれば
上評とは往かぬが兎に角垢ぬけはして居たり此の人音聲がハキとせぬ
ため一段引立たぬ所あるは氣の毒であります、信安も斯ういふものは適
しません◎三番目葛城 シテ木下敬賢、ワキ尾上始太郎敬賢は大兵肥満、
殊に劍客の事なれば節々固く鬼をも拉しきさうな身體、それで此の髪物
はチト無理です、どうも情がうつりません、おまけに論ひが威かついの
て尙更感しが薄いです、こんなものを勤むるのは當人の損であります、
始太郎のワキに好評の好の字は取られました◎四番目葵上 シテ片山九
郎三郎、ワキ鍋本祚胤かういふものは九郎三郎に適つて居ますから好い
出来てした然し音聲が兄さんのやうに美しくないので此の人も損な所
があります、てはあるが形はなか／＼悔り難い所があるからモツと年を
取たら立派な能役者になるてありませう◎トメ亂 シテ橋岡久太郎、ワ

キ石井儀一、久太郎は清康の秘藏弟子で壯健な時分よく仕込まれたから、總ての仕こなしが師匠そっくりで近來は頗る腕を上げました、◎仕舞多人数の仕舞がありましたたが巧いのもあればカラ見られないものもありました、今度は紙面に餘地がありませんから次回より漏らさず評を下して見ませう◎狂言 小早川精太郎の名取川此の人なか／＼達者で能く出て来ます、次は吉野徳三郎の喉嚨此の人もおひ／＼巧くなつて来ましたが、終りが高島彌五郎の福の神此の人七十歳ほどだと聞きましたが壯健に面白く演ります東京の和泉流では此の老人が牛耳を執て居ます脱俗した藝てあれが、枯た藝といふのであらうと思ひます

梅若の納能(十二月十三日)

◎脇能繪馬 シテ觀世織雄、姥鈴木亥三郎、ツレ男神萬三郎、女神六郎、ワキ大友信安、織雄も實翁や萬三郎の仕込みで段々善くなつて来ましたが、まだ／＼藝がコナレて居ませんから何をしても何處となく物足らない心持が致します、然し今日のは悪い方ではないと思ひます◎二番目鉢木 シテ萬三郎で、ツレ一噌鏡二、ワキ野島信、期るものには最も適りたるシテなれば固より悪からん筈なく前後とも申し分なく大喝采、殊に替裝束といふ小書付きなれば後シテは侍烏帽子に法被大口にて一層雄々しく見えたり、鏡二のツレも謹しみて勤めたれば悪しからず、信も五三經驗ある事とて能く出来たり◎三番目源氏供養 梅若豊作の代りに萬三郎が勤めたれば觀客に取りては却つて仕合せなりしなるべし◎四番目葵上 シテ六郎、ワキ信起れ亦適りて居ればシテは大喝采を博したり◎トメ亂 萬三郎六郎の兩人にてあれば和合の舞い知らぬ妙味ありけり

觀世會の納めの素話(十三日)

素話は廿一番で番外に、小澤良輔シテ、清水福太郎ツレ、武田宗次郎ワキの礎がありました、何がさて三美聲のそろひてしたから結構でした囉

投書

能樂と謡曲に關した事をどし／＼と寄稿ありたし

觀世流改訂論本につきて

明治 生

明治に於ける能樂の發展、謡曲の流行は實に梅若翁の獨力能樂を維持したりし功に依るものにして、かの徳川時代の文物習慣多く荒廢し盡さんとしたりし明治初年に於て不幸にも同翁の經營することなかりせば恐らく能樂謡曲の今日は悲惨極るものたりしなるべし。能樂が翁によりて一縷の命脈を保ち岩倉公の醫療により回春復活の道を得たる過去を顧れば斯界諸老は今昔の感に堪へざるものあらん。

かく梅若翁はひとり觀世流のみならず、一般能曲界の明治における中興の祖にして、當時一意専心翁の業を助けたりし觀世鐵之丞氏梅若六郎氏(今の觀世清之翁)の功も又決して没すべからず。

かくして漸次發展の緒につき、畏くも英照皇太后陛下の大御心を寄せさせ給ひし事あり、能樂會の設立あり、芝能樂堂の建築あり、隆々として時を得たる能樂界の今日あるは此間斯界に盡力したりし諸士の功益し能樂史上に傳ふべきもの多かるべし。

諸士の功は徒にあらざ見よ五流悉く立ち、舞臺各所に建設せられ、能樂の開催引きもさらず、謡曲の聲市中到る處に聞く、斯界の隆盛今日の如きは稀なり。

されどもその盛なるは徳川時代に於ける能樂の復活活動するにすぎずして明治時代に入りて新に發達の歩を進めたるものにあらず。能樂は生きたる能樂は活動すれどもその智を啓きたるにあらず。廣きに於て年々歳々膨脹しつゝあるも深きに於ては三百年來何等認むべき進歩あることなきなり。

此時に生れたる觀世流改訂謄本こそ能樂あつて以來企てられざりし深きに於ける擴張に向つて一新紀元を造りたるものといふべきなれ。明治の能樂界は能くこの國樂を傳へ能くその發展を盡したるを後世に誇ると共に此改訂本の出生を更に大に誇るべきなり。

舊來の謄曲本の字體不完全にして讀むに難く、其節付粗大にして理解すること難く、其訂正不親切にして現時謄本處と相違するもの多かりし不便は早く既に一般に認められ、その完全なるもの、出づるを望むこと夏の草葉沛然たる雨を待つ概ありしにもかかはらず、自家の營利に忙殺せられ日本能樂界全般の利益を忘れたる一部の人の手に於て永く虚名の下に謄本發行の專權を握られたりし爲め、斯界は今日まで遂に此恩惠を享くる能はざりしなり。

改訂本刊行會が一切の事情を排し、堂々として正義の上にたち、百千の艱難に抗しつゝ、謄曲本に於ける三百年の弊を一掃し、文に節に大訂正を施し、此完全なるもの、發行を敢行したる、その勇氣や嘆賞すべく、その訂正や深く感謝すべきものにして斯界を益すると獨現代に止らず、長く遠く斯界に大切なるものと謂はざるべからず。聞説京都繪畫店は刊行會の行爲を不當なりとしてその發行差止の訴訟を提起したるも請求の理由なしとして檢方の敗訴に歸したりとか。邪は終に正の敵にあらざるなり。今改訂本を見るに文の訂正には井上文學博士あり、丸岡桂氏あり節付

訂正には斯界の泰斗觀世清之翁あり、文は謄本に易く理解するに易く、節は謄曲音階の基礎なる上中下の律を正し、微細なる音の高低聲の變化をも洩すことなく、能に關すること、舞に關すること、拍子に關すること、小謄奏論に關すること、拍子に關すること、細大記さざるなく訂正殆んど間然する處なしと雖、只新しき製版なるを以て時に少數なる校正の誤あるは惜しけれども責任ある正誤表の出づることなれば責むべき程の事ならず。節付に過去の謄本にあらざりし語記號等の記入あるが、之は最後に詳密なる説明を付するよしなれども、讀者の便ともなるべければ次號に刊行會に依頼してその説明を掲載すべし。

小生は尚能が好きにて大概な用事は捨置て出掛ますが兎角時間に掛値があつて八時始めが九時にもなり甚だしきは十時になるものもありますれば何卒キチンと勵行して戴きたいものです △△生

演能の中に小聲で地の謠ひに附いて自憐げに諷ふ半可通あり又狂言の時となると平生底の高聲で難談する連中あり當人は德意で心持が宜しいか存せぬが傍の人には非常に害があります是等の人には要するに公德を重んぜぬ輕薄な人物でせうが然し捨置と何處まで他人の妨害をするか知れませんから何とか彼等を矯正する事は出来ぬものでせうか實に奮慨に堪へぬであります 天保老生

是れは少々野郎な申分ではありますが能樂堂をはじめ各舞臺とも中賣の物品が非常に高價のやうに思はれます尤も賣上の何分との幾割とか其の會主へ租稅的の納めものを致さんければならぬための内情もなきにしもあらずらざるべけれど芝居や寄席と異い候あひだモウ少し手輕に便するやう致したきものと思ひますが諸君は何といふお考へをお持になつてあつて、すか伺がひます 廉價生士

能樂は高尚優美にして自然觀客の敬意を起さしむる程のものであるに見所の周旋をするもの、中に印半天を着たる股引を穿き勇み風にして能物の物と調和せざる人物を使役する所ありあれば何とか服装を替へては羽織着流しといふ風體にても改良して頂戴したものと存じ候なり 觀實道人

雜 錄

べんげいが、なぎなたを以て、といふべきを、べんげがな、きなたを以てと讀んだといふ事は、さなた讀みと稱して昔時より誤讀の誠しめに引かるゝ一笑話であるが此程或る謡曲の先生の所の稽古を傍聴して居るに竹生島を習ひ居たるが一生が、爾も大聲に張上げて「船がついて候」といふべきを「ふねかついて（船擔いで）候とやらかしたので一坐ドット噴飯たりとかや

誤讀にもなか／＼可笑きがある熊野をクマノ、春榮をハルノサカエ唐船をカラフネ、石橋をイシバシ、飛雲をトビクモ、國栖をクニガラ、通小町をトホリコマチと讀むなど滑稽至極なり

蓋し能評家羽山尙徳氏の筆に成りしものならんと察せらるゝが先頃の時事新報の能評の末文に左の如く記してある又近頃の攝津の大椽の藝談として同新報に左の記事がある尙徳氏のは直接に謡曲の事を言へるにて攝津大椽のは淨瑠璃を語る上に就ての事なれど殆んど符節を合せたるが如き見地にて大椽の言亦謡曲家の参考ともなるかと考ふれば遂に茲に併せて摘録す

甲 謡客あり山姥を得意ものとして謡ふ彼れ自ら曰く數千遍繰返した

れば其効空しからず斯く無本にてゴマ節一つ誤らず謡ふことを得るに至れりと然り誠に文句も誤らずゴマも認まらず如何にも樂に謡ひ飛す處は感心なものなり去りながら氣合もなく心持もなく緩急疾舒所謂、序破急などいふこと少しも有るなく唯建、板に水的の謡なるのみ然るに又乙謡客あり景清を得意として謡へども必らず謡本を前に廣げて謡ふ去りながら氣合あり心持あり緩急疾舒即ち所謂序破急ありて目を閉ぢ靜聽し來れば悪七兵衛其人が其場に現はれ出て、昔忘れぬ物語りをするの感じあり因て思ふ無本の域に進まんと固より願欲する所なりと雖ども物其物に成らざるときは無本の効何くに在りや畢竟 謡本を便りにするを惡しといふは目と口とにて謡ふ凡謡に陥いらん事を誠しむるに在り虚心實腹の域にだに進みたらんには文句と節との心得のために本を前に廣げ置きたりとして何の不可あらん（無本にて物その物に謡ひ得らるゝ域に至るの本願たるは論無きのみ）觀世左近云く謡に三病あり聲のよきと覺えの強きと拍子のさゝたると此の三事備はれるもの多分謡に成らずして止むと又觀世一座の學頭たりし日吉市十郎管て堀口某に謂て曰く御邊の謡は聲と節と拍子とを覺込んだ謡て今更俄に直しやうもなしまづ／＼當流には聲なく節なく拍子なしと心得て修行召されよと兩先修の言深く味はふべし乃ち經歷も自家の器用も捨てる工夫を積むにあらざれば徒らに惡るズレのするのみにて奥意は曉り難し

攝津大椽藝談に曰く（上略）それに近頃は娘義太夫などに稽古をして御貴になると師匠の方からヨウ／＼など、聲（編者曰く所謂も世辭贊にて凡謡師匠には往々此の嬉しがらせを振かくるがあり）を掛けて嬉しがらせを申しますからツイ餘計に喉を揮回して賞められた

いと云ふ様な事になるので段々と肝腎な節が崩れてしまひますが之を私共の方では前受と申して充分に戒めねばならん事になつて居ります昔の名人は客に賞められると其處を非常に氣にしたもので家に歸つてからも其賞められた處を充分に研究して工風に工風を凝らしたと申します、客に賞られてそれを氣にするとは随分解らない様では御座りませうけれど淨瑠璃を語る太夫の技藝が眞の妙所に這入りますとお聴きになつて居る方も我を忘れて技藝をお賞めになる餘地のあるものではありませんので六ヶしく申すと神に入るとか申して太夫の語る人物が眞に其人物になつて了ひますとそれに動かされて拍手喝采すると云ふ餘裕のある筈は御座りませう淨瑠璃は全體に節が附いて居りましてそれを三味線に合せて調子を附けたもので御座いますから何處か一所耳立つてお客の頭に響く様な處があるのは語る太夫よりもお客の頭に一層餘裕があるに相違御座りませうお客が拍手喝采してヨウ／＼杯とお賞めになる處は技藝の拙いので其處に切込んで賞るので御座いますからそれを喜んで賞められたのだと思ふのは大きな考へ違ひかと存じます眞に賞められるの是一段を語り了つた後「ア、面白かつた」と云ふ心持が座中一般に満ちて何處となく溜息を吐く様な云ふに云はれぬ一種の聲が聞えます之を私共の方では「ジワ／＼が来る」と申しまして始めて藝が聴衆を感動させたと云ふ事になるので御座います何うも當節の人は「ジワ／＼」を取る事を考へませんで唯一心は「ヨウ／＼」ばかりを言つて貰ひたがるには困ります

編者曰く此の説總ての音曲者の傾聴すべき價値あり、譬へば誰は聲が美いと彼れの謡ひは能く鼓に合ふとか某は足の運びが鮮だ

とかいひて貰ひれば當人もその氣になりて鼻を蠢かす是れ大いなる僻事にて所謂のヨウ／＼に満足し拍手に喜悅するの輩のみ何ぞ

以て謠曲能樂の眞理を語るに足らんや、噫、或謠の師曰く、今の謠を習ふ人達は、只節のみに身を入れて詞の研究をせんから困る元來節の方には種々表情の譜があるから、どちらかといふと、少々拙くても人に幾分の感じの興へられぬ事はないが、詞には譜がないから其の人物をいひ表はすのが中々むづかしい、隅田川の語り攝待の語り杯と來たら尋常の人には感じを興へるほど演れる氣遣ひなし、此の詞といふやつは淨瑠璃の方でも難事とするものと見えて此頃東京に來て居る摺津の大様も「辭の遣ひ方は實に難しいもので此の辭が巨く演れますれば充分に御座います、どうして中々さう容易くはまゐりませぬ、同じ勇士を語りますにも加藤清正もあれば四王天但馬守もあります其等は、尙だ可いと致しましてた處で中には、どうしても語り分けの附かんのが御座ります、それを語り別けますのが眞の名人と云ふもので我々風情の到底及ぶ所では御座りませぬ」と言つて居る實にその通りで、同じ尉でも善知鳥と融鶴飼と兼平などは區別を付けなければならぬまいし均しく美しい女でも定家と松風とは差別しなければならぬまい、であるから詞を粗略に稽古するやうでは、まづ謠ひは満足に諷るへやうにはなれまいと言つても宜からふと思ふ

謠曲は少年の中から稽古するに増した事はないが、其の人の心掛けと勉強とに依つては晩年から初めたりとて成功せぬ事はない、謠曲は習ひたいがモウ老人だからと言つて尻込みをするのは勇氣が乏しいといふものである次號に五十以上から稽古をはじめて立派に諷るやうになつた人の興味ある直話を掲げて參考に供へやう (未完)

◎觀世會素話の納會 去る十三日午前八時より麴町區永田町の星ヶ岡茶寮に於て觀世會素話の納會ありしが來會者七八十名にて盛會なりきとぞ

◎梅若の納會 去る十三日淺草區南元町の梅若舞臺に納めの演能ありしが相變らずの大入りし由

◎板權問題の訴訟 兼て諸曲界の一大問題たりし京都の書肆槍常之助氏より東京の丸岡桂氏に係る版權侵害の訴訟は去る十五日原告たる槍氏の敗訴に歸したり然るに當日は黑白分目の事として被告本人はいふまでもなく關係人一同早朝より東京地方裁判所民事二部裁判長嘉山幹一判事前田久次郎中込宗造の諸氏出廷せる民事二部法廷に入り判決如何と待ち居たるに中々判決なく午後六時に至り裁判長は他の事件を審理し了り其のまゝ閉廷したれば原被の面々這は如何したる事にやあらんと問ひたるに判決ならば書記課に至れよとの事に付皆々書記課に至りける處書記雜賀武雄氏が煙草を吸ひながらウム判決かそれは裁判長から原告の敗けだと知らせて遣れとの事であつたと無造作な答へなりしかば勝訴の被告側は胸撫て卸して欣々然として立去りしも原告側は凡そ判決の言渡しは公開の法廷に於てなされるべからざるものなるに是くの如き判決は當に憲法違反にて其效なきのみならず職務曠廢の處置なれば異議を申し立てんと教團居るとかやいへり

◎温故會 昨十九日は本郷區千駄木町の久保扶桑氏方に在る清園舞臺に於て前田子爵の主催に係る素人能ありき

◎寶生會の演能 今度日午前八時より神田區猿樂町二丁目十一番地の

寶生會に於て演能あり番組は別項に掲げたり

◎謡曲大辭典 今度吉川弘文館より發行したる能樂大辭典は記載の事項豊富にして且つ附録の裝束作物等の繪畫の鮮明なれば頗る好評なるのみならず好誦好能家は一本を備へ置かざるべからざる良書なり委細は本日

の廣告にあり

本誌創刊忽卒の際にて寫眞も甚だ鮮明を缺き記事も編者の意に充たざる點多々なり然れども回を加へ號を重ねるに隨ひ總て改善をなすべしを以て將來をお楽しみに御購覽のほど偏へに奉願候 編者伏して白す

去る十三日梅若納會の番組は左の如し

能組

繪

馬

鉢

木

源氏供養

葵

上

亂

置

和合之舞

觀世織雄

大友信安

大倉繁次郎

三須五郎

杉山立枝

梅若萬三郎

野島信

石須清吉

一噌又六郎

替裝束

梅若豐作

大友信安

幸川崎利吉

梅若六郎

野島信

幸田清吉

觀世元虎

梅若萬三郎

梅若六郎

幸田清吉

觀世元虎

野島信

幸田清吉

觀世元虎

野島信

幸田清吉

觀世元虎

野島信

幸田清吉

觀世元虎

狂言 筑紫奥 正木辰雄 吃り 山本東次郎
 棒縛 岡田紫男

番組

去る六日觀世舞納會の番組は左の如し

能組

和布刈 片山九郎三郎 實生 新 吉川崎利齋 一松村實吉
 山階徳次郎 大友信安 三吉見嘉樹 藤田多賀造
 本下敬實 葛城 尼上始太郎 高安鬼三 杉山世元 枝規
 片山九郎三郎 葵 上 片山九郎三郎 大倉繁次郎 一山上貞胤
 橋岡久太郎 福の神 高島彌五郎
 狂言 名取川 小早川精太郎 吸 啞 吉野徳三郎

去る十三日麴町區永田町星ヶ岡茶寮に於て催したる觀世會納會の素謠番組は左の如し

素謠

和布利 鶴龜 春榮 蟻通 熊野
 遊行柳 藤戸 三輪 東北 蟬丸
 嵐山 卷絹 花月 加茂 俊寛
 松風 西行櫻 浮舟 絃上 弱法師
 狸々

番外

碓 清水福太郎 武田宗次郎
 小澤長輔
 實盛 山階徳次郎 石田清次郎 一噌米次郎
 邯鄲 橋岡久太郎 高安鬼三 觀山世元 枝規

月並能組

本月廿日寶生會の能組は左の如し

繪馬 野口政吉 野口實五郎 高安鬼三 松山村立枝吉
 瀬尾 要 三須五郎 杉山立枝吉
 俊成忠則 石川退輔 吉見嘉樹 藤田多賀藏

吉野 静

藤野 静平
尼上 始太郎

川崎 利吉
清次郎

一増 要三郎

態 阪

櫻岡 金太郎
加藤 景信

大倉 繁次郎
三須 平司

増見 仙太郎
一増 又六郎

乱

松本 長
寶生 新

石田 清吉
大倉 喜太郎

觀世 元規
寺井 三四郎

狂言 塗 附

村野 萬作

布施 無經

山本 東次郎

腥 物

野村 萬造

福の 神

岡田 榮男

稟 告

兼て弊店に於て賣捌きつゝある全國謡曲家番附表中東京の現住者にして
木下敬賢大友信安東條照映野島信綱木胤祚京都の大江又三郎林喜右衛門
大坂の大西寛一郎同く亮太郎の諸氏の如き有名なる人々の行司部内に漏
れたるは編者の誤りにて誠に遺憾とする所なるのみならず此の他にも知
名各位の漏れたるも蓋し亦鮮ならざるべし因て今般本誌の發行を幸ひ全
國の謡曲家は何流にても僅に紅葉狩一番修めたる人に至るまで一人も殘
さず尊名を募集すると同時に何流に何人といふ好謡家の現はれ来るかの
豫想數を明春二月廿八日中に御投票ありたし本店は左の規定に據り其の
豫想數が募集の人員に適中若しくは接近したる向きへそれ／＼景品を贈
呈仕候向は右調査の結果發表の上は全國の黒人素人一切の謡曲家一覽表
を編輯發行致し候豫定に候也

稟 告 規 定

一 豫定人員の投票は實地謡客の募集數に適中若しくは接近せしを第一等
の當選とす譬へは實地募集の尊名が某流十萬某流六萬ありし所へ豫定
投票が某流十萬又は九萬八千某流六萬又は五萬八千といふが如きをい
ふ

一 其地方に在りて十名以上の謡客を住所姓名流名を併記して報道せし人
を以て投票權を有するものとす故に報道の勢を取り給はる諸君は其現
住の地名番地を詳記あらん事必要なり

一 投票用紙葉書に限る

一 五流謡曲家人員豫選當選者への賞品は左の如し

- 第一等賞 坂巻書伯揮毫の能書一面但し(額地)
- 第二等賞 上等尺一の扇一面
- 第三等賞 謡曲用神代杉見臺一臺
- 第四等賞 素謡用扇一面
- 第五等賞 同
- 第十一等賞 謠手帳一冊
- 第二十一等賞 素謡扇一本
- 第三十一等賞 以下扇一本つゝ
- 第五十一等賞 第四十一等賞
- 第七十一等賞 第六十一等賞
- 第九十一等賞 第八十一等賞
- 第一百一等賞 第壹百等賞
- 第一百二十一等賞 第百十一等賞
- 第二百二十一等賞 第百三十一等賞
- 第四百二十一等賞 第百五十一等賞

東京市神田區錦町二丁目四番地

發 賣 元

高 陽 堂

吉野 静

藤野 濤平
尾上 始太郎

川崎 清次郎

一噌 要三郎

態 阪

櫻岡 金太郎
加藤 景信
松本 長
寶生 新

大倉 繁次郎
三須 平司

増見 仙太郎
一噌 又六郎

乱

石田 清吉
大倉 喜太郎

觀世 元規
寺井 三四郎

狂言 塗

附 村野 萬作
布施 無經

山本 東次郎

腥 物

野村 萬造
福の神

岡田 榮男

稟 告

兼て弊店に於て賣捌さつゝある全國謠曲家番附表中東京の現住者にして
木下敬賢大友信安東條照映野島信鏞木胤祚京都の大江又三郎林喜右衛門
大坂の大西寛一郎同く亮太郎の諸氏の如き有名なる人々の行司部内に漏
れたるは編者の誤りにて誠に遺憾とする所なるのみならず此の他にも知
名各位の漏れたるも蓋し亦鮮ならざるべし因て今般本誌の發行を幸ひ全
國の謠曲家は何流にても僅に紅葉狩一番修めたる人に至るまで一人も殘
さず尊名を募集すると同時に何流に何人といふ好謠家の現はれ來るかの
豫想數を明春二月廿八日中に御投票ありたし本店は左の規定に據り其の
豫想數が募集の人員に適中若しくは接近したる向きへそれ／＼景品を贈
呈仕候尚ほ右調査の結果發表の上は全國の黒人素人一切の謠曲家一覽表
を編輯發行致し候豫定に候也

稟 告 規 定

一 豫定人員の投票は實地謠客の募集數に適中若しくは接近せしを第一等
の當選とす譬へは實地募集の尊名が某流十萬某流六萬ありし所へ豫定
投票が某流十萬又は九萬八千某流六萬又は五萬八千といふが如きをい
ふ

一 其地方に在りて十名以上の謠客を住所姓名流名を併記して報道せし人
を以て投票權を有するものとす故に報道の勢を取り給はる諸君は其現
住の地名番地を詳記あらん事必要なり

一 投票用紙葉書に限る

一 五流謠曲家人員豫選當選者への賞品は左の如し
第一等賞 坂卷書伯揮毫の能畫一面但し(額地)

第二等賞 上等尺一の扇一面

第三等賞 謠曲用神代杉見臺一臺

第四等賞 素謠用扇一面

第五等賞 同

第十一等賞 謠手帳一冊

第二十一等賞 素謠扇一本

第三十一等賞 以下扇一本つゝ

第五十一等賞

第七十一等賞

第九十一等賞

第一百一等賞

第二百一十一等賞

第四百一十一等賞

東京市神田區錦町二丁目四番地

發 賣 元

高 陽 堂

能畫會

同巾尺三物 金八圓
 同尺五物 金十圓
 同尺八物 金十六圓
 同尺十物 金十八圓
 同尺十二物 金二十圓
 同尺十五物 金二十五圓
 同尺十八物 金三十圓
 同尺二十物 金四十圓
 同尺二十五物 金五十圓
 同尺三十物 金六十圓
 同尺四十物 金八十圓
 同尺五十物 金一百圓
 同尺六十物 金一百二十圓
 同尺七十物 金一百五十圓
 同尺八十物 金一百八十圓
 同尺九十物 金二百圓
 同尺一百物 金二百五十圓
 同尺一百二十物 金三百圓
 同尺一百五十物 金三百五十圓
 同尺一百八十物 金四百圓
 同尺二百物 金四百五十圓
 同尺二百五十物 金五百圓
 同尺三百物 金五百五十圓
 同尺三百五十物 金六百圓
 同尺四百物 金六百五十圓
 同尺四百五十物 金七百圓
 同尺五百物 金七百五十圓
 同尺五百五十物 金八百圓
 同尺六百物 金八百五十圓
 同尺六百五十物 金九百圓
 同尺七百物 金九百五十圓
 同尺七百五十物 金一千圓
 同尺八百物 金一千五十圓
 同尺八百五十物 金一千六十圓
 同尺九百物 金一千七十圓
 同尺九百五十物 金一千八十圓
 同尺一千物 金二千圓

懷中 便覽うたひ手帳

右者大々高評を博したり
 特別減價郵税共金三十二錢

▲能舞臺説明圖▲五番本いろは索引▲五番本一覽表▲季節別▲素諸役數
 ▲謡曲家心得▲日曜表▲獨吟二十七集種有りて旅行又は諸會に於て欠く
 べからざる便覽なり▲謡曲家名簿▲白紙及名刺代用紙▲名刺狭み有りて
 日常必携の良冊也

特別木製小見臺

右者木質を撰み月と瓢箪の形も書工の手を経て切ぬき紫打紐を以て留め
 組立自由の良品なり

輕便紙製小見臺

錦繡珍張 金四十錢
 更紗張 金三十五錢
 同無地張 金三十錢
 同紙張 金二十錢
 郵税 金八錢

右者弊堂新案專賣品に候
 ▲裏面に五番組表觀世流全部と外に三讀物▲巻別の順▲重習及九番習の
 別▲季節の別等▲悉く表を附けたる高尚品なり▲猶明春に至り寶生流を
 取調製造す

座敷用大見臺

神代杉金二圓五十錢より二圓迄
 杉柁金一圓八十錢より壹圓三十錢

右者組留にして兩方下總の組立自由品なり別に打合せ品價金八十錢なり

觀世流改訂謠本

全貳百番
 金拾四圓六拾錢
 (但シ郵税別ニ申受)

右刊行會發行本入用者ハ至急申込マザレバ増刷分品
 切トナル

觀世謠曲八十番集

全四册
 價金七圓
 (但シ一回貳圓拂全納六圓五十錢)

右薄葉紙旅之友携帶至便品ナリ

謠ひ手ほとさ

全壹册
 郵税共金貳拾八錢

袖珍獨吟集數百五十九番

觀世流謠曲全書

全四册
 價金拾貳圓

右洋裝親筆袖珍本にして囊入四十二年の一月下旬よ
 り配本豫約方法あり貳錢送れ

此外何流を不問御注文次第買合せ送本可致候

謠曲家全國大見附

賣價五錢
 郵税貳錢

全國黑人素人を網羅せしものなり

能狂言繪端書

書題、鉢本、末廣、羽衣、
 節分、舟遊慶
 右五枚一組價二十錢
 郵税五組迄二十錢

露光量違いの為重複撮影

舞扇尺壹物

其外習物御開き用等の御注文に應ず

普通金四十錢より三圓五十錢
特製上々十五圓まで

素謠用男女持扇子

金十三錢より金四十五錢

繪畫羽衣鉢木石橋安宅等の諸各模様附價金四十五錢より六十錢

諸本用本箱

右者從來市内は元より各地方よりの御注文續々被仰下奉謝候

紫木 抽 出 附
桐 上 二 圓 四 圓 附
同 通 甲 乙 丙 丁 戊 己 庚 辛 壬 癸
神 杉 甲 乙 丙 丁 戊 己 庚 辛 壬 癸
同 杉 甲 乙 丙 丁 戊 己 庚 辛 壬 癸
同 杉 甲 乙 丙 丁 戊 己 庚 辛 壬 癸
此 外 御 注 文 品 差 出 御 依 頼 見 合
以 上 市 内 配 送 料 左 表 に 付 御 注 文 品 指 定 の 品 御 送 金 次
第 發 送 可 致 候

本箱運賃表

小田原 (一圓入) 六拾五錢
靜岡 (一圓入) 七拾五錢
名古屋 (一圓入) 八拾五錢
岡崎 (一圓入) 九拾五錢
廣門 (一圓入) 一圓
大津 (一圓入) 一圓
仙臺 (一圓入) 一圓
右外箱代籠り居り又表中に無地は大略右に習ひ御送金乞▲殘金は御返し可申候

明治四十一年十二月十五日印刷
明治四十一年十二月三十日發行



發行兼印刷人 東京市神田區錦町二丁目四番地 前田義胤
編輯人 東京市小石川區大和町十七番地 澤藤孝三郎
印刷所 東京市神田區雜子町三十四番地 成章堂
發賣元 東京市神田區錦町二丁目四番地 高陽堂

本誌定價表(前金)	廣告料
一冊(郵稅共) 金拾八錢	特別廣告 金參拾五圓
五冊(五ヶ月) 金八拾錢	行頁廣告 金拾圓
拾貳冊(壹ヶ年) 金貳圓拾錢	

能樂寫真賣捌所

長門長府土居之内町 備後福山今町 豐前中津町 岡山市仲之町 福岡市博多中島町 廣島市鹽屋町 播磨龍野町 姫路市元鹽町 神戸元町七丁目 大阪三休橋安土町北入 名古屋市門前町 京都二條麩屋町 山形市七日町 信濃市本町二丁目 同濃松本町二丁目 同長野市本町二丁目 相摸小田原幸町二丁目

福重 木新 津喜 藤喜 善支 積支 竹野 山内 熊野 吉野 其野 檜野 五野 小出 高美 萩朝 平積 善陽 福熊 木新 津喜 藤喜 善支 積支 竹野 山内 熊野 吉野 其野 檜野 五野 小出 高美 萩朝 平積 善陽 堂館店作店助堂店助店堂店店平店店

舞扇尺壹物

普通金四十錢より三圓五十錢
特製上々十五圓まで

素謠用男女持扇子

金十三錢より金四十五錢

謠本用本箱

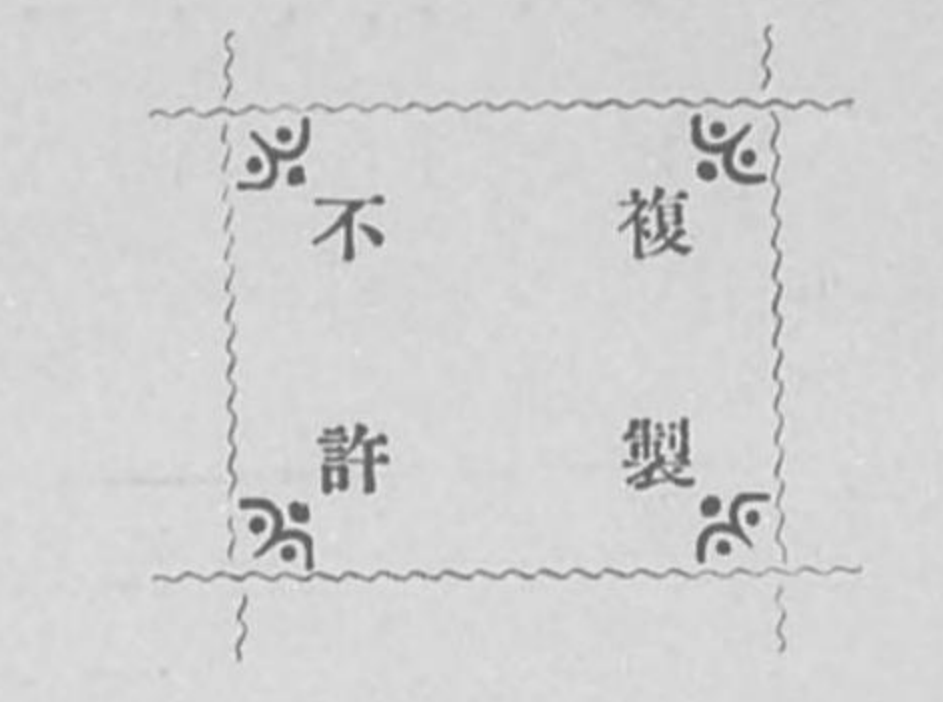
右者従来市内は元より各地方より
の御注文續々被仰下奉謝候

紫木 抽 金十圓 附
桐上 金四圓 附
同 通 金四圓 附
神杉 金五圓 附
同 杉 金五圓 附
此以 金三圓 附
外同 金二圓 附
市注 金二圓 附
内文 金二圓 附
品は 金二圓 附
配は 金二圓 附
送内 金二圓 附
可致 金二圓 附
候

本箱運賃表

小田原	静岡	名古屋	京都	廣島	大阪	門田	大津	松本	仙臺	右外箱代
沼津	岡部	岐阜	神戶	兵庫	徳島	徳島	徳島	湯	湯	御返し可申候
六拾八錢	七拾五錢	八拾五錢	九拾五錢	九拾五錢	九拾五錢	九拾五錢	九拾五錢	九拾五錢	九拾五錢	

明治四十一年十二月十五日印刷
明治四十一年十二月三十日發行



發行兼印刷人
前田 義胤
編輯人
澤 藤三郎
印刷所
成章堂
發賣元
高陽堂

本誌定價表(前金)	一冊(郵税共)	金拾八錢
特別廣告	半頁	金貳拾五圓
廣告	一頁	金貳拾五圓

能樂寫真賣所

長門長府土居之内町
備後福山今町
豊前中津町
岡山市仲之町
福岡市博多中島町
廣島市鹽屋町
播磨龍野町
姫路市元鹽町
神戸市元町七丁目
大阪三休橋博勞町北入
大坂心齋橋安土町北入
名古屋心齋橋門前町
京都市二條麩屋町
山形市七日町
信濃市本町二丁目
同 長野市本町二丁目
相模小田原幸町一丁目

福新熊 木重 津喜 善喜 善喜 積積 竹内 山内 熊谷 吉野 其野 檜中 小出 高美 萩原 平積 井原 福新 木重 津喜 善喜 善喜 積積 竹内 山内 熊谷 吉野 其野 檜中 小出 高美 萩原 平積 井原

能學界破天荒の一大出版

謡曲二百六十五術語を網羅して難解の辭句圖書極彩色能面
十餘番口傳秘傳に及ぶ釋然水解毒する非能樂大辭典は見よ
○圖書は帝室博物館御所藏甚多秘藏の能面其他を臨寫せる時代の珍書なり

前田子爵題詠 正田梅華先生編 進呈本
三井元之助先生序 飯田巽先生序 雨谷一榮庵先生編



東宮職御用 九條公爵御用 岩倉公爵御用 拜受 其他今日までに申込者の數二萬有餘部に達す

○本書は單に斯道研究家のみならず文學家畫家其他技藝工藝家等必須の書たり
無世の筆を以て鮮麗す眞は是れ所謂錦上添花の便法あり
特價二月三十日限
八圓 金五十錢 臺灣 金六十錢 内地 特價二回

順風に帆を揚げて生れたる本新所行發
非常なる大晴採を以て迎へられぬを右にせざる可らず
洋装背革 金銀箔模焼粧飾 刺上洋紙印刷
全一冊 本文二千四百餘頁 附別冊六十八頁
製本既成
錦上添花
(四四二替振) 肆書用御省內宮弘川吉
區橋京市馬東 目丁一町傳南

終